大都市圏高校生の進路意識と行動

—普通科・進路多様校での生徒調査をもとに—

比較教育社会学コース　苅谷剛彦
大学評価・学位授与機構　濱中義隆
比較教育社会学コース　大島真夫
比較教育社会学コース　林未央
東京都立市ヶ谷商業高等学校　千葉勝吾

Career Choice among General High School Students in Urban Cities:
A Survey of Students with No Jobs and No Colleges

Takehiko KARIYA, Yoshitaka HAMANAKA, Masao OSHIMA, Mio HAYASHI, Shogo CHIBA

Recent national statistics show that about 10% of new high school graduates don't have any jobs or college education after high school; they are called MUGYOSHA in Japanese. Especially in urban areas, students from lower ranked general high schools tend to be those MUGYOSHA. Many of those students don't commit themselves to any activities to seek for jobs or college education after graduation. Why are they inactive in exploring their future careers? How do they perceive their own "aptitude and ability"? How is their career consciousness structured? What experiences they have in and out of school influence their career perspectives? Based on questionnaire survey of 1098 high school students in 11 general high schools in the Tokyo Metropolitan area, we pursue those questions.

We obtain the following findings. 1. Students career consciousness is structured with 6 elements, and the main three elements are present-orientation, understanding own aptitude, and commitment to meritocratic values. 2. School's career guidance activities have little impact on those elements of career consciousness, although students outside school life have much influence on them. 3. Students' family background influences formation of career consciousness, and final careers, by restricting students' chances to enter colleges. 4. After controlling such other variables as gender, grades, economic family background, and high school rank, those three main elements of career consciousness have independent effects on students' chance to be MUGYOSHA. According to those findings, we discuss that with limited resources to socialize students into jobs, lower ranked general high schools face difficulties to help students find their own future career, under strong values of self-decision and self-responsibility of new-liberal education reforms.

目　次

1　問題の所在と本論文の構成
2　高校生の意識構造と進路分化
3　進路意識の規定要因
4　進路指導に乗れないメカニズム—インタビューデータからの分析—
5　「進路えらび」と進路意識の関係
6　結論と含意

1　問題の所在と本論文の構成

A　問題の所在

近年，高卒無業者は，卒業生のおよそ1割を占めるようになっている。かつては「フリーター」と呼ばれ，個人の自由意志によってアルバイト生活を選んでいると思われた若者たちに対し，現在ではより深刻な社会からのまなざしが向けられるようになっている。「新規学卒無業者」問題は，たんなる自由意志に基づく選

択の結果ではない。そこには，高卒者をめぐる進路機会の構造的変化が，若者たちの意識を媒介としつつ，進路未決定という選択を導くメカニズムが働いていると考えられる。一見，自由な意志に従った選択に見える現象は，どのような要因の絡まりによって生じているのだろうか。

この論文は，大都市圏において，職業教育を提供しない，進路多様校と呼ばれる普通科の高校を舞台に，未定を含めた卒業後の進路へと生徒たちを導くメカニズムを解明することを目的としている。職業意識の形成において，専門高校とは異なり「就職へ」の明確な水路づけが難しい普通科の進路多様校では，生徒たちの進路意識はどのように形成されているのだろうか。進学か就職かを色分ける「チャーター」が不明瞭な普通科進路多様校の生徒たちは，進路についてどのような意識を持つにいたるのか。そうした意識は，彼ら・彼女たちの学校内・学校外の生活や，高校の進路指導とどのように関係しあっているのか。さらには，進学や就職の機会を制約する諸条件によって，彼ら・彼女たちの進路意識はどのような影響を受け，その帰結として，彼ら・彼女たちの進路選択にどのような影響を及ぼしているのか。進路指導という「支援」や「介入」の形式は，そこでどのような役割を果たしうるのか。

この研究は，チャーター機能の弱い「普通トラック general track」の普通科高校の生徒の進路意識と進路選択活動の関係を探ることを通じて，高卒無業者を生み出さざるを得ない，日本の高校教育の構造的特徴を明らかにしようとするものである。

高卒無業者問題について，その析出の原因をさぐる研究はこれまでに多々積み重ねられてきた[1)]。これらの研究により，進路未決定の裏に階層やジェンダーの問題があること，さらには現行の進路指導の問題などが明らかにされている。私たち研究グループもこうした関心を共有し，これまで，生徒・教師・保護者の相互作用のなかで生徒を無業者に導くことから救えない構造が生じていること，社会変化に伴う生徒の意識の変容によって現場の進路指導担当教員がジレンマを抱える状況が生じていること，またそうした問題への対処という点で現行の進路指導体制がはらむ問題の中身，といった諸問題を分析してきた[2)]。これらの研究は，大きな社会・経済構造の変化のなかで高校生がおかれる全体的な状況を，さまざまな視点から明らかにしたといえよう。

しかしながら，これら一連の研究がいまだ十分に扱いきれていない重要な論点が1つある。進路指導を提供しようとしても，それにのってこない高校生の存在であり，彼ら・彼女たちがいったい何を考え，なぜ進路選択のための活動を自ら行なおうとしないのか，という「自由意志」の問題である。とりわけ，チャーター機能の弱い普通科の進路多様校において，高校生は何を考えどのように進路を選択しているのか。進路活動にのろうとしない彼ら・彼女たちの意識は，何によって規定され，どうすれば改善できるのか。そして，改善が困難であるとすれば，その原因はどこにあるのか。高校生の意識と直接に向き合いながら日々の実践に携わる現場の進路指導担当教員にとって，これらは切実な問題である。ところが従来の研究のなかでは，進路活動にのろうとしない高校生の意識がどのように構成されているのか，生徒たちの生活とどのように関係しあっているのかといった問題は十分解明されることはなく，就職状況の厳しさ・家庭背景といった外在的要因の分析から類推されるにとどまってきた。進路意識が不明確だとか，稀薄だと言われることはあっても，それがどのような意識の織りなす結果であるのかを丹念に捉えようとした研究はほとんどなかったのである。

それに対しこの論文では，大都市圏の普通科進路多様校の生徒たちの多面的な意識のあり様に焦点をあてる。私たちが，大都市部の普通科進路多様校に着目するのは，そこが，日本の教育と雇用・進学機会の変化の交錯する場である，と考えるからである。高卒後の進路の制約を狭めないようにと，高校増設期に大量につくられた普通科高校においては，卒業後に「フリーター」となるためのアルバイトの機会も豊富に提供されている。大都市部に位置することから，進学しようと思えば，地方に比べ専門学校・各種学校や大学・短大などの進学先も多い。さらには，後に詳しく見るように，大都市部の高校教師の意識を反映してか，進路指導による締め付けも弱い。そこで学ぶ生徒たちは，ある意味で，もっとも「自由」を満喫できる条件を与えられた，自己決定の「主体」とみなすことさえできるだろう。

このように，一見すると自由に見える彼ら・彼女たちの進路選択は，どのような意識によって導かれているのか。その意識の特徴と，意識に影響を及ぼす要因・影響を及ぼし得ない要因，それら総体の結果と見なしうる生徒の進路活動とその帰結――これらの関係を解きほぐすことによって，自由意志に基づく「主体的な進路選び」を基本原則とする進路指導理念の問題点を剔りだすことができるのではないか。十分な資源が与えられることもなく，主体的な選択を重視せざるを得

ない，普通科の進路多様校が抱えざるを得ない問題点を明らかにすることができるのではないか。これらの問いに実証的な解答を与えることによって，意識を媒介とした高卒無業者析出のメカニズムを明らかにすることがこの論文のねらいである。

B　本論文の構成

以上の関心にたち，本論文は以下の4つの問いを明らかにする。

(1) 進路の決定にかかわる高校生の意識はどのような構造をもっているのか。またその意識構造は，高校での進路決定に際しいかなる役割を果たすのか(第2節)。

(2) 高校生の意識構造の源泉はどこにあるか。また生徒の意識への働きかけにおいて，普通科進路多様校での進路指導はいかなる効果をもつか(第3節)。

(3) 自己選択を基点とする進路指導の理念は，教師たちの実践にどのような枠づけを与えているのか。進路指導の理念をより徹底させたものとして推し進められている進路指導の早期化・統合化は，そのなかでいかなる帰結を見るのか。そのなかで，進路指導に乗り切れなかった生徒はどのように処遇されていくのか(第4節)。

(4) 高校生の意識とその他の背景要因とは，進路えらびのプロセスにいかにかかわっているか。進路未定者輩出のプロセスを，どのように描きなおせるか(第5節)。

以上の分析によって，高校生の意識の特徴とそれを支える背景が何であるのか，さらにそれらが，現行の普通科進路多様校での進路決定という文脈のなかでいかなる進路選択を生むことになるのかが明らかにされるはずである。最後の第6節では，この結果を踏まえながら，普通科進路多様校において進路指導が直面する問題にいかなる対応が必要か，その含意を述べる。

C　調査の概要

私たち研究グループは，2002年1～2月にかけて，大都市圏の進路多様校を中心に高校3年生に対する質問紙調査を実施した[3]。調査対象はY県の進路多様校[4]11校(すべて普通科)，有効回答数は1098票である[5]。なおこの調査に合わせて，対象校のいくつかでは進路指導担当教員に対するインタビュー調査も行っている。

表1-1には調査対象校の学校ランク(入学難易度)，2001年度の進路状況を，また表1-2には県内での調査対象校の位置づけについて示した。学校ランクは，晶文社出版『首都圏高校受験案内'02』を参考にした(10A，10B，9A，9B…の順にランクが高い)。対象となった11校は，いずれも入学難易度が中位以下の学校であるが，このうちK校については近年進学実績を伸ばしており，他の対象校とくらべ回答傾向がかなり異なる。このため，今回の分析にあたってはK校を除く10校についての分析とした。

(苅谷剛彦，林未央)

表1-1　調査対象校の概要

学校	ランク	進路								回答者計
		進路決定者				進路未決定者			その他	
		小計	就職	大学・短大	専各	小計	未定	バイト・パート		
A校	3A	61.5	26.5	14.5	20.5	38.5	8.5	29.1	0.9	(117)
B校	3A	56.8	15.7	17.6	23.5	43.2	13.7	27.5	2.0	(102)
C校	4A	66.7	10.8	32.4	23.5	33.4	10.8	21.6	1.0	(102)
D校	3A	71.5	35.1	9.1	27.3	28.6	9.1	18.2	1.3	(77)
E校	6B	83.7	3.1	42.6	38.0	16.3	11.6	4.7		(129)
F校	6A	83.9	6.2	59.2	18.5	16.2	13.1	3.1		(130)
G校	5B	84.0	10.2	29.7	44.1	16.1	5.1	7.6	3.4	(118)
H校	4A	80.7	26.9	25.8	28.0	19.3	7.5	11.8		(93)
I校	4B	71.5	28.4	15.5	27.6	28.4	6.9	19.8	1.7	(116)
J校	4A	60.4	17.5	27.0	15.9	39.6	19.0	19.0	1.6	(63)
K校	7B	96.1	2.0	78.4	15.7	4.0		2.0	2.0	(51)
計	―	72.9	17.0	28.7	27.2	25.9	10.2	15.7	1.1	(1098)

表 1-2　調査対象校の県内（普通科公立高校）での位置づけ

	上←														→下
	学校ランク														
	10A	10B	9A	9B	8A	8B	7A	7B	6A	6B	5A	5B	4A	4B	3A
学校の分布(%)	0.7	3.3	4.7	2.0	3.3	8.7	4.7	9.3	8.0	10.0	10.7	9.3	6.0	10.7	8.7
今回の対象校								K 校	F 校	E 校		G 校	C 校 H 校 J 校	I 校	A 校 B 校 D 校

2．高校生の意識構造と進路分化

進路の決定にかかわる高校生の意識はどのような構造をもっているのだろうか。またその意識構造は，高校での進路決定がもつ制度的枠組み（進路指導が生徒にどのように働きかける性質のものであるのかということや，高校卒業時までに進路を決定する，という時間的制約を前提に最終的な進路が決まること）と照らし合わせてどのような特徴・機能を持つものとして捉えられるか。こうした問いが，本節が明らかにするべき課題である。

“まじめに学校生活を送り，そのなかで適性を把握できること，またそうした過程をもとに高卒時に進学か就職，いずれかの進路が決定できること”が，学校のめざす理想的な進路決定プロセスである。しかしながら，こうした進路決定プロセスが，少なくとも一部の学校群で成り立たなくなってきていることは既にさまざまな先行研究によって指摘されている。それでは，なぜこの「理想的」進路決定プロセスが不可能になってきているのか。

この疑問に対して先行研究が用意してきた答えは，今の生徒たちの意識とそれに伴う行動とが，現行の進路指導を受けつけなくなっているからだ，というものであった。しかし，高校生の意識には，進路えらびと直接かかわると思われるものだけでも，職業・将来に対する構え，自己評価など，さまざまな側面が含まれていると考えられる。決して一枚岩的なものではない。だとすれば，ここから以下のような疑問を引き出せよう。高校生の意識にはそもそもどのような側面があるのか。またそれらの間の関係はいかなるものか。それは，学校の想定する「理想的」進路決定プロセスとどの程度合致した構造になっているか。意識構造は，本当に最終的な進路決定にまで影響をおよぼすか。こうしたことを詳しく明らかにしようとした研究の蓄積は見られない。以上の関心から，本節は高校生の意識を中心的な分析対象とし，その構造を描き出すこと，加えてその意識構造が進路指導や進路決定といかなる関係にあるのかを明らかにすることを目的とする。

A　高校生の意識構造

本項では，高校生の意識の有り様を明らかにする。多面的な高校生の意識構造を要約して示すために，因子分析の手法を用いていくつかの意識次元を抽出し，さらに抽出された意識次元どうしの関連を検討する。因子抽出法としては主因子法を，また因子軸の回転方法としては，各次元間の関連を考慮する目的から斜交回転（プロマックス回転）を採用する。

進路選択とわずかでも関わりがあると考えられる質問項目（すべて 4 点尺度で，職業・将来に対する構え，学校的価値に対する見方，自分の適性や能力に対する評価などを尋ねている）をすべて投入し，共通性の極端に低いもの（0.15以下）を除いた[6]うえで試行錯誤しながら結果を導いた。

分析結果

(1)　意識のさまざまな次元

以上の方法によって分析を行った結果，表 2－1 に示すように 6 つの因子を抽出できた。第 1 因子は，自分の適性把握にかんする質問に高い負荷があることから「適性把握失敗」，第 2 因子は，自分に対する肯定的な評価を尋ねる質問項目により構成されることから「自信」，第 3 因子は，学校の成績に対する信頼の程度を尋ねる質問項目を含むことから「メリトクラシーに対する親和性」，第 4 因子は，短期的な見通しをたずねる質問項目に高い因子負荷があることから「現在志向」，第 5 因子は，好きな仕事を重視し，こだわりを持っているかをたずねる質問項目に高い因子負荷があることから「好きな仕事に対するこだわり」，第 6 因子は，社会に出ることへの不安・忌避感をたずねる質問項目により構成されることから「不安」と命名した。

さて，この因子分析により抽出された 6 因子は，職業選択と直接にかかわるものであったり自己評価であったり，さまざまなレベルの意識を含んでいる。これら

表 2-1　高校生の意識にかんする因子分析の結果

	第1因子 適性把握失敗	第2因子 自信	第3因子 メリトクラシーに対する親和性	第4因子 現在志向	第5因子 好きな仕事に対するこだわり	第6因子 不安
どんな仕事をしたいのかよくわからない	.831	.114	.018	-.068	-.128	.009
自分のむいている仕事わかっている	-.572	.273	.018	.168	.070	.075
実際やってみないと適職はわからない	.559	-.031	.003	.078	.350	-.029
自分のやりたい仕事を絞るのはまだ早い	.445	.167	-.018	.195	.070	-.089
自分の進路に今でも悩む	.436	.030	-.013	.032	.001	.216
自分には人より優れたところある	-.012	.845	-.070	.003	-.036	.023
たいていのことはうまくこなせる	.109	.674	.035	.008	-.013	-.114
成績のよい者が就職で有利なのは当然	-.014	-.035	.644	.043	.006	-.079
学校の成績と仕事の能力には関係ある	-.076	-.056	.541	.078	-.061	-.037
高卒後の進路によって将来かなり決まる	.036	.020	.518	-.129	.054	.081
学校の成績は将来を決める	.058	.011	.504	-.031	-.001	-.036
将来よりも今の生活を楽しみたい	.093	-.037	-.037	.633	.100	-.027
若いうちはやりたくない仕事つきたくない	-.092	.042	-.007	.572	.017	.077
将来のことを考えるのは面倒だ	.197	.025	.090	.447	-.259	.094
進路について真剣に考えないと将来困る	.029	.150	.200	-.235	.178	.228
適性がなくても好きな仕事したい	.132	-.081	.033	.246	.592	.013
やりたい仕事で早く一人前になりたい	-.032	.012	.037	-.007	.437	.067
やりたい仕事なら給料半分でよい	.115	-.033	-.087	-.149	.410	-.002
自分には10年後の目標がある	-.232	.101	-.007	-.039	.386	-.079
社会でうまくやっていけるか不安	.101	-.060	-.085	-.048	.026	.643
上司から仕事ができるか否かで評価されるのは苦痛	-.067	-.049	.015	.140	.027	.597
固有値	3.475	2.206	2.026	1.503	1.184	1.033

因子抽出法: 主因子法　回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

※ 職業・将来に対する構え、学校的価値に対する見方、自己評価など、進路選択とかかわりがあると思われる意識を尋ねた計 23 項目のうち、共通性の極端に低い (0.15 以下) 2 項目を除き計算を行った。

表2-2　因子相関行列

	第1因子「適性把握失敗」	第2因子「自信」	第3因子「メリトクラシーに対する親和性」	第4因子「現在志向」	第5因子「好きな仕事に対するこだわり」	第6因子「不安」
第1因子		-.260	.204	.410	-.459	.354
第2因子	-.260		.072	.130	.330	-.238
第3因子	.204	.072		.120	.042	.373
第4因子	.410	.130	.120		-.266	.081
第5因子	-.459	.330	.042	-.266		.040
第6因子	.354	-.238	.373	.081	.040	

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

の意識がどのように関連しあって高校生の意識構造を織りなしているのか，次にそれを検討しよう。

(2) 意識次元どうしの関連

ここでは，因子分析において算出された因子相関行列(表 2－2)をもとに意識因子どうしの関連を考察する。なお，そうした関係が学校の想定する「理想的」進路決定プロセスとどの程度合致した構造になっているかを探るという，本節はじめに立てた問いに答えるために，進路指導の働きかけが意識のどの部分におよぶことを意図しているか，という点に注目しながら仮説的に意識の因果モデルをたてることをめざす[7]。

表 2－2 からは，まず第 1 因子「適性把握失敗」と第 4 因子「現在志向」，第 5 因子「好きな仕事に対するこだわり」の間に強い相関を確認できる(中抜きゴシック字部分。それぞれ正の相関，負の相関)。進路指導による働きかけにおいて想定される時間の流れに鑑みれば，この 3 つの因子は「現在志向」→「適性把握失敗」→「やりたい仕事に対するこだわり(を持てない)」，という因果関係を想定できるものとして捉えられよう。自分の適性を理解する作業は，将来に対する見通しなくしては難しいと考えられる。同時に，好きな仕事に対

するこだわりも，適性把握を前提に形成される。進路指導においては，こうした常識的に理解される意識の連なりを想定しながら，働きかけがされるものと思われる。

では，これら3つの因子と他の因子との関連はどうだろうか。表2-2からは，第1因子「適性把握失敗」と第6因子「不安」，第2因子「自信」と第5因子「好きな仕事に対するこだわり」，2つの関係に比較的強い相関が見出せる(ゴシック部分。いずれも正の相関)。

まず第1因子と第6因子の関係については，「適性把握失敗」→「不安」という因果が考えられる。現代の社会では一般に，適性を把握し職業につくことが個人の一生にとって大きな意味をもつと考えられている。それゆえ，適性把握ができているか否かは個人の自己評価にも何らかの影響を及ぼすと思われる。したがって，適性把握の有無が「不安」感という一種の自己評価に影響する，という因果を想定するのが妥当だろう。第5因子と第2因子の関係についても，同様の理由から「好きな仕事に対するこだわり」→「自信」という因果として捉えられる。もちろん，実際の意識としては，逆の因果も十分想定できようが，学校の進路指導は，ここで想定した因果が機能することによって，生徒が学校の進路指導の枠組により取り込まれていくことを意図しているのではないか。

以上から，軸となる「現在志向」→「適性把握失敗」→「やりたい仕事に対するこだわり」，という因果の先に，結果としての「自信」，「不安」が位置する大きな因果関係を想定できる。もちろんこうした因果は絶対ではない。実際には，意識因子間により複雑な関係性があるだろうことは大いに予想される。ただそうとはいえ，進路指導の想定する枠組みにおいて生徒の意識連関をある程度説明可能であること，また進路指導が働きかけを意図する部分の意識と自己評価とがある程度高い関連性を持つことはここで確認されたといっていいのではないだろうか。近年の高校生の学校・職業に対する意識の変容はつとに指摘されてきたことであるが，そうしたなかでもやはり，高校生の将来や職業に対する構えは進路指導の枠組みと合致する部分を保ちながら存在しているし，「自信」「不安」といった高校生の自己評価は，職業に対する見通しと大きく関連していると考えられる。

さて，以上のほかに強い相関が見られたのは，第3因子「メリトクラシーに対する親和性」と第6因子「不安」である(表2-2下線部分)。「メリトクラシーへの親和性」が，高校での進路決定の制度的枠組において前提となる価値観でもあることを考えると，学校の進路指導としては，上に見たのと同様，「メリトクラシーへの親和性」が生徒の自己評価を左右し，生徒が進路指導の枠組により取り込まれていくことを期待しているだろう。したがって，「メリトクラシーへの親和性」→「不安」という因果が想定し得る。ところで，2つの因子が正の相関をもつことから，これは，メリトクラシーに親和的であれば社会に出ることへの不安が高くなる，という関係と把握される。今回調査対象となった進路多様校の生徒においては，メリトクラシーを軸とした配分図式にのっては成功しにくい者もかなり存在する。そのため，メリトクラシーを認めることと不安とがプラスに関連する，という関係が現れたと推測される[8)]。進路指導の想定する意識の枠組に沿う関連性を見せながらも，その中身は学校的価値に同調し，そこでやっていくことで自信が生まれる，といったポジティブな関係ではない。適性把握に見たのとは異なり，学校的価値への同調が社会に出ることへの不安をかきたて，またそうした自分に対するネガティブな意識が学校的価値への同調を強める，といった連鎖がそこにはあるのかもしれない。

進路指導による働きかけとより近い位置にあり，意識全体の核として捉え得るものが何かを考慮しながら以上を図示すれば，図2-1になろう。表2-2からは，このような形で，進路指導の想定する意識枠組と合致する連鎖を多く持ちながら高校生の意識が構成されている状況を読み取ることができるのである。

(3) 高校生の意識構造と進路決定プロセス

ここで，本稿はじめの問題関心に立ち戻ってみよう。先行研究がいうように，進路多様校の生徒がおかれる就職状況の厳しさ，学力や生活態度における困難さを理由に“高校の進路指導は失敗している”ということは簡単である。しかし，ここまでに見た意識の大枠の連関は，進路指導の枠組とかなり合致していた。このもとでは，適性把握を促し，職業への態度形成をめざす進路指導の役割は決して小さくないはずである。ではどのようにすれば進路指導はうまく機能するのか。このためには，上にみた生徒の意識が，どのように形成され，またいかなるプロセスによってある進路につながるのかということ，すなわち進路指導がおかれている文脈を明らかにしなければならない。意識の実態の分析は，本論文はじめに述べた視点の重要性を改めて示したといえよう。次項では，そうした分析を次節以降で行う前段階として，本節最後の課題，意識構造は，

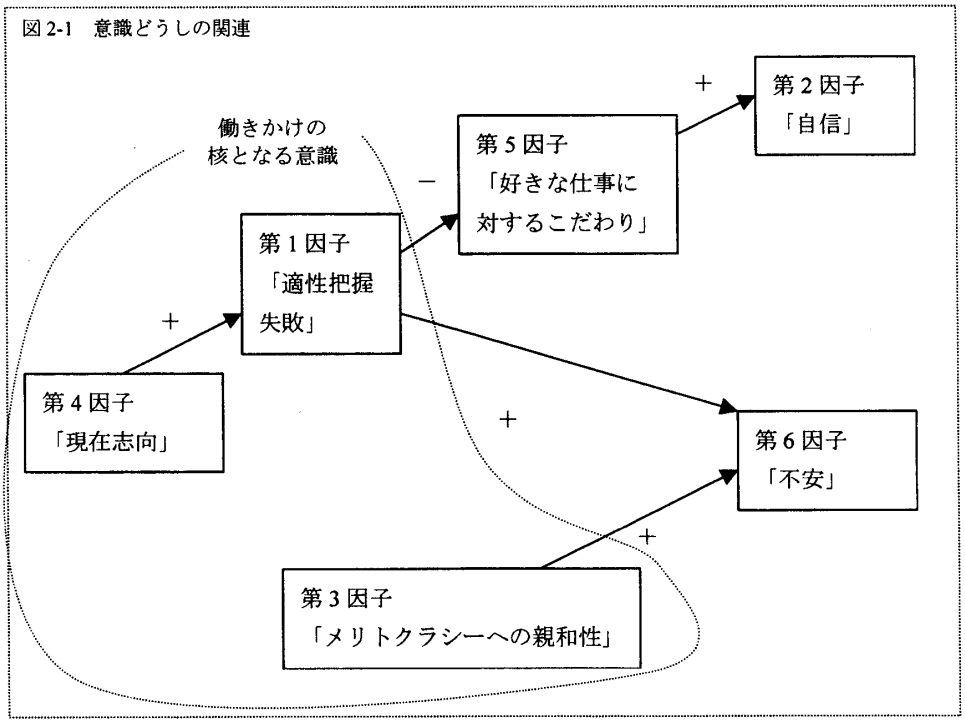

図 2-2　生徒の意識タイプ

時間選好	メリトクラシーに対する親和性	適性把握	
		している（−）	していない（+）
将来志向（−）	親和性あり（+）	タイプ 1（−+−）	タイプ 2（−++）
	親和性なし（−）	タイプ 3（−−−）	タイプ 4（−−+）
現在志向（+）	親和性あり（+）	タイプ 5（++−）	タイプ 6（+++）
	親和性なし（−）	タイプ 7（+−−）	タイプ 8（+−+）

図中の符号は因子得点の符号。

本当に最終的な進路決定にまで影響をおよぼすか，という点についての確認を行っておくことにしよう。

B　高校生の意識タイプと進路

ここでは，以上に見た高校生の意識構造と進路との関連の概要を検討する。とりわけ，進路指導が直接にはたらきかけようとする意識側面が，進路決定といかなる関係にあるかに注目していきたい。したがって，ここでの分析は，因果の元となる「現在志向」「適性把握失敗」「メリトクラシーへの親和性」(図 2-1，点線囲み部分)の 3 因子に限った検討とする。この 3 因子がそれぞれどのようになっていると，どの進路が多くなるのか。因子の組み合わせによって，どの程度進路に差が生じてくるものなのか。あるいは差は生じないのか。この問いを明らかにするために，まず各々の因子得点の符号から生徒を図 2-2 のように分類した。そのうえで，表 2-3 に示すように，意識タイプと進路との関係を見た。

その結果引き出せる知見は，以下の 4 点にまとめられる。

(1)　将来志向のグループでは進路決定者が，また現在志向のグループでは進路未定者が多くなっている。

タイプ 1 ～ 4，5 ～ 8，それぞれについて進路決定者，未決定者の割合を見てみると，タイプ 1 ～ 4 (将来志向)のほうが進路決定者の割合が多く，タイプ 5 ～ 8 (現在志向)では未決定者の割合が多い。とりわけ，将来志向であり適性把握のできているタイプ 1，3 と，現在志向のタイプ 5 ～ 8 の差は歴然としている。ここから，まず前提条件として将来志向であるかどうか，さらに適性把握ができているかどうか，ということが，進路決定の有無にとって大きな意味を持つ可能性が読

表2-3　生徒の意識と進路のクロス表（%。括弧内は実数）

	(N)	進路決定				進路未決定			その他	計
		小計	正社員として就職	大学・短大に進学	専各に進学	小計	アルバイト・パートで生活	未定		
タイプ1：将来志向・メリト親和的・適性把握	(132)	87.1	18.9	31.1	37.1	12.9	6.8	6.1		100
タイプ2：将来志向・メリト親和的・適性わからず	(87)	73.5	12.6	41.4	19.5	26.4	12.6	13.8		100
タイプ3：将来志向・メリト非親和的・適性把握	(209)	80.9	18.7	27.3	34.9	17.2	11.0	6.2	1.9	100
タイプ4：将来志向・メリト非親和的・適性わからず	(91)	70.4	18.7	34.1	17.6	27.5	16.5	11.0	2.2	100
タイプ5：現在志向・メリト親和的・適性把握	(55)	65.5	12.7	25.5	27.3	32.7	12.7	20.0	1.8	100
タイプ6：現在志向・メリト親和的・適性わからず	(211)	69.7	16.6	28.0	25.1	29.4	15.2	14.2	0.9	100
タイプ7：現在志向・メリト非親和的・適性把握	(83)	63.9	13.3	18.1	32.5	33.7	27.7	6.0	2.4	100
タイプ8：現在志向・メリト非親和的・適性わからず	(122)	63.9	17.2	28.7	18.0	35.3	24.6	10.7	0.8	100
計	(990)	73.4	16.8	29.1	27.5	25.5	15.2	10.3	1.2	100

み取れる。前項では，「現在志向」→「適性把握失敗」→「好きな仕事に対するこだわり」という意識連鎖を想定したが，この連鎖が実際の進路決定の有無に大きな影響をもつ可能性があるということである。

では，この連鎖を負の方向(現在志向を持つことによって適性把握に失敗し，好きな仕事に対するこだわりも持てない，という因果が作用してしまう)に作用させないために，進路指導における働きかけはどの程度功を奏しているだろうか。もし，今の社会状況や高校生の意識・行動の現状に鑑みて進路指導の働きかけの有効性が疑われるのであれば，本稿はじめに述べたように，こうした意識連鎖を前提として行われる現行の進路選択制度のありかたそのものに疑義が提出されるべきだろう。いずれにしても，実際の進路決定そのものが，こうした意識連鎖を媒介とする可能性を，ここでは確認できるのである。

(2)　将来志向のグループに注目すると，適性把握はできていない一方，メリトクラシーへの親和性を持つ人々において，大学・短大進学の割合がもっとも高くなっている。

メリトクラシーへの親和性は，全体的に進路に対して大きな影響を持たないように見えるが，将来志向のグループに注目してみると，適性把握のできていないタイプ2，4，とりわけメリトクラシーへの親和性があるタイプ2では，大学・短大進学の割合が高くなっている。大学進学者で第6因子「不安」を肯定する割合が高い(他の進路をとった者が肯定的回答をする割合は50%をやや超えるのみであるのに対し，大学・短大進学者では59.0%)ことを考えると，進路多様校にありながら学校的価値に対する信頼があり，それゆえに社会に出ることへの不安を感じる層が，さらなる学歴を身につける手段として大学・短大進学を選ぶ可能性もある。

では，なぜそうした層が専各進学ではなく大学・短大進学を選ぶような結果がここで見られるのだろうか。適性把握なしに学校的価値にコミットすることが，大学・短大への進学にプラスの影響を持つならば，その事実を進路指導の理念に鑑みてどのように捉えればよいだろうか。家庭背景その他が進路にもつ影響も考慮した場合に，その問題はどのように見えてくるのだろうか。この結果からは，こうした疑問が生じる。

(3) 適性把握をしているグループでは，専各進学者となる割合が高い。

専各進学者について見てみると，適性把握ができているグループでの進学割合がかなり高くなっている。現在志向の者であっても，とりわけメリトクラシーに非親和的である場合，将来志向のものにひけを取らない割合で専各に進学しているのである。

最近の高校生において，職業への理解を深め将来のビジョンを描く意識が低いまま進路を選ぶ傾向があることはたびたび指摘されてきた。しかし，適性把握と専各進学との間に強い関連があることを示すこの表からは，次のようなことが考えられる。一度も社会に出たことのない高校生にとって，現実の職業を理解するのは難しい。そうしたなかで，専各は，職業に対する具体的イメージを高校生にあたえる役割を果たしている可能性がある。実際，進路と第5因子「仕事へのこだわり」との関係を見てみると，専各進学者において仕事へのこだわりが強い(他の進路をとった者が肯定的回答をする割合は40～50%にとどまるのに対し，専各進学者では58.8%)。

適性が把握できており，仕事へのこだわりが強い高校生は以前にも存在したはずだが，こうした層が大学・短大進学や就職でなく，専各進学へと導かれるのはなぜなのか。高校生が，専各の提供する職業イメージのなかにしか魅力ある職業を見出せない状況があるのかどうか。加えて，専各進学が，将来志向を持ち適性把握ができているグループで多く出現するのみならず，現在志向であり学校的価値にコミットしないグループにおいて多く見られるこの表の結果は，現行の進路決定枠組に対して何を示唆するのだろうか。この知見からは以上のような疑問が導かれる。

(4) どの意識グループにおいても，突出して就職者の割合が高くなる状況は見られない。

なお，以上のように意識と進学との間に何らかの関係が見られるなか，そうした枠から1つはずれているのが就職という進路である。

それでは，就職という選択は果たしてどのような要因によって決まっているのか。学校生活や家庭背景など，意識以外の要因の影響を強く受けるのか。大都市圏の普通科進路多様校という文脈のなかで，進路指導と就職との関係性はどのようなものになっているのか。こうしたことが疑問として提出できよう。

以上の考察からは，進路指導の理念が働きかけを強く意図してきた意識の各側面が，実際の進路決定ともかかわっている可能性が示唆された。進路にかかわる意識は，単に学校による働きかけの対象としてのみならず，現行の進路決定制度のなかで，ある進路に生徒を誘導する装置として実効性を持っている可能性があるのである。しかも，本項の知見(2)，(3)で見出されたのは，進路指導の理想とする意識の連鎖が必ずしも起こっていないグループにおいて，大学・短大，専各進学者の割合が多くなる状況であった。さらに(4)で得られた結果は，ある進路(ここでは就職)にかんして，意識を媒介とした進路決定枠組が作用しなくなる場合もあり得ることを示唆していた。

このような結果を考えると，(1)～(4)の各考察においても若干触れたように，高校生の進路分化のトレンドそのものに変化が生じており，またそれをとりまく社会状況も変わっているなかで，現行の進路決定の枠組が持つ意味とはどのようなものになっているのか。そうした状況において，学校の進路指導とはどういう機能を持ったものであるのか。という疑問がわく。こうした視点にたちながら，進路決定に大きく影響する生徒の意識は何によって規定されるのか，またそこに学校の進路指導がいかにかかわれるのかという問題，加えて，現在の高校生の進路分化のマクロなトレンドや，家庭背景等生徒をとりまく環境を鑑みた場合，生徒の進路分化がいかなる色合いを持って見えてくるかという問題を明らかにしていく必要があるのではないだろうか。

以上の分析は，このような研究課題の存在を浮かび上がらせてくれるものと位置づけられる。

C　小括

以上では，時間選好，適性把握，メリトクラシーへの親和性，といった，学校・職業に対する高校生の構えが「自信」や「不安」といった自己評価とも関連して存在し，進路決定やその中身にも影響していることが確認された。高校生の意識は，これゆえに高校の進路選択がはらむ問題を考える鍵として重要である。以下，本筋で提出された疑問を明らかにしていくが，まず次節では，生徒の意識が何によって規定されているのか，そこで学校の進路指導が及ぼし得る効果，といった問題を扱っていく。

(林未央)

3．進路意識の規定要因

A 進路意識を規定する要因の設定

(1) 分析の視角

本節の目的は，普通科進路多様校に通う生徒たちの進路意識がどのような要因によって規定されているかを明らかにすることにある。学校，社会，家庭など様々な環境の中で過ごす高校生が，進路意識を形成するにあたってどこからどの程度影響を受けているのか。そうした多様な環境の中で，学校は果たして進路指導などを通じて高校生の意識に働きかけを行いうるのであろうか。以上の点を本節では検討しよう。

進路意識の規定要因をここで検討する理由は2つある。1つは，前節でも既に指摘されたように，進路意識と進路選択には一定の関係が認められるということである。すなわち，時間選好(将来志向か現在志向か)が進路決定の有無を分け，メリトクラシーへの親和性や適性把握が進学先の選択に影響を及ぼしているのであった。

それでは，こうした進路意識は何によって影響を受け成立しているのだろうか。もし意識を規定する特徴的な要因があるとすれば，それが意識を媒介として進路選択にも影響を及ぼしていると見ることができる。その意味で，進路選択のあり様を明らかにするには，意識の規定要因を探ることが必要だと言える。

同時に，こうした意識の規定要因に対する関心は，本論文の枠組みとも密接に関係するものでもある。本論文における我々の関心は，高校生の進路選択を理解するにあたって，高校生本人の意識要因と高校生を取り巻く家庭背景などの社会構造的要因を含めた3者の関係に焦点を当てる，というものであった。前節で明らかにしたように進路意識と進路選択に関係があって，また先行研究が指摘してきたように社会構造的要因と進路選択の間にも一定の関係があるとすれば，では意識と社会構造的要因との関係はどのようなものであるのかという問いが必然的に浮かび上がってくる。高校生の意識は，社会の様々な条件と無関係に存在しているわけではない。ある意識を強く有すること(あるいは弱く有すること)と，意識とは別の社会構造的要因(学校外の要因・生徒の属性的要因)との間には何らかの関係があると想定できる。そうした社会構造的要因を視野に入れて意識の規定要因を明らかにすることは，意識要因，社会構造的要因，進路選択の三者の関係を明らかにするうえで是非必要な作業である。

進路意識の規定要因を検討するもう1つの理由は，現在の進路指導が生徒の自己決定を何よりも重視し，自己決定ができるような進路意識の形成に焦点をあてて指導をしているという点である。進路指導で教師に求められているのは，生徒に対して指図や強要をするのではなく，あくまで援助者として，生徒が主体的に進路えらびをすることができるように環境を整えることである。そのため，近年では進路に関する情報の提供機会を増やしたり，あるいは生徒が実際に大学や専門学校，職場等に入って体験学習をするといった取り組みが多数行われるようになってきた。そこでは，情報や体験を通じて将来を考えるきっかけを作り(「現在志向」から「将来志向」へ)，職業イメージを具体化させ進路意識を明確化させる(「適性把握失敗」をしないようにする)ことを狙っている。しかしながら，生徒の進路意識が，こうした学校側の働きかけとは別のところで決まってしまっているとしたらどうだろうか。果たして学校の取り組みは生徒の進路意識に働きかけることができるのだろうか。進路指導が効果を持つ可能性を探る意味でも，様々な要因の中で学校の働きかけが持つ影響力を測定することが必要である。

(2) 変数の設定と分析の方法

以上のような分析の視角から，ここでは高校生の進路意識に影響を及ぼす要因として，学校内の要因，学校外の要因，生徒の属性的要因の3つをとりあげ，どの要因がどの程度意識に対して影響しているのかを分析する(具体的な変数の設定方法は表3-1を参照)。もちろん，高校生の意識に影響を与えうる要因は多種多様であり全てを網羅的に検討することは不可能だが，本分析では以上の3つに限定して議論を進めていくことにする。3つを取りあげる理由は，それぞれ以下に述べることによる。

第一の要因については，「進路指導」に着目した。変数として設定したのは，大学や職場の見学・体験学習の経験の有無である。先述の通り，大学や専門学校あるいは職場等での体験学習が近年数多く行われるようになってきたが，こうした進路指導の取り組みがどの程度進路意識に影響を与えているかを検証するためである。

第二の学校外の要因については，「学校外文化との接触」と「アルバイト経験」に着目する。学校による働きかけ以上に，学校外での生活のありようが生徒たちの意識を強く規定している可能性が考えられるからである。実際に生徒の中には，学校が終われば(時には

表3-1　変数の設定

学校内の要因	
進路指導	「職場見学や職場体験学習」「大学・短大等の見学」の2項目について、それぞれ経験があるかないかで「どちらもない」「職場のみあり」「大学等のみあり」「両方あり」4つのカテゴリーをつくり、ダミー変数化したもの。それぞれ、該当する生徒は　1、非該当の生徒が　0である。表3-10における重回帰分析では、「どちらもない」を基準にしている。
学校ランク	ダミー変数：　0=ランク下位校（表1-2のうちランク3以下の高校）、1=ランク中位校（表1-2のうちランク4以上の高校）
高校での成績	5点尺度：　5が一番上、1が一番下（自己評価）
学校へのコミットメント（遅刻の頻度）	4点尺度：　4=よくした、3=ときどきした、2=ほとんどしなかった、1=ぜんぜんしなかった
学校外の要因	
アルバイト経験	ダミー変数：　0=バイト経験なし、1=バイト経験あり
学校外文化との接触	合成得点：　4点尺度（4=よくやる、3=ときどきやる、2=あまりやらない、1=まったくやらない）で回答する次の6つの質問項目の回答を、標準得点化した上で足しあわせた もの。 Q1：放課後、大きな繁華街に行く　Q2：タバコをすう　Q3：髪の毛を目立つ髪型や色にする Q4：夜中にコンビニやファミレスに出かける　Q5：学校以外の友達とつきあう　Q6：夜11過ぎに家に帰る
属性的要因	
性	ダミー変数：　0=男性　1=女性
家庭背景	進学を望む家庭、進学を望まない家庭、希望不明の家庭の3タイプに分け、ダミー変数化したもの。それぞれ該当する家庭が　1、非該当の家庭が　0である。表3-10における重回帰分析では「進学を望む家庭」を基準にしている。

授業中であっても）繁華街に出たりあるいはコンビニエンスストアに行くなどして仲間と出会い時間を過ごす者もいる。そうした学校外の環境の中で何らかの意識が形成され，さらにそれが進路意識にも反映されていくということは十分に予想される。また，アルバイト経験についても同様である。就労体験を通じて，あるいはアルバイト先などで知り合った仲間の影響を受けて，仕事や働き方に対する見方が変わり，進路意識に変化がもたらされるということもまた十分に予想される。こうした学校外での生活の影響が強いとすれば，学校による進路指導の影響も生徒たちの意識を変えるには至らないかもしれないのである。

生徒の属性的要因としては，家庭の経済的余力を示す代理指標として「進学を望まない家庭」「親の意向がわからない家庭」という変数に注目する。家庭が進学を望まないということは，その前提として家庭に進学させるだけの経済的余力が十分にないということを意味するだろう[9]。そうだとすれば，生徒の意識は既に閉ざされた進学機会を前提に形成されているかもしれないからだ。

以上のように変数を設定した上で，次のような方法で分析を行う。ここで検討するのは前節の因子分析によって得られた意識因子の因子得点である。まず，意識の規定要因としてあげた各変数のカテゴリーごとに，各意識因子の因子得点の平均値がどのように異なるかを見て影響力の有無を確かめる。そうした平均値の比較を行った上で，次に重回帰分析を行い，他の要因を統制した時の，その要因が持つ独自の影響力の有無を確認する。

B　分析の結果

(1)　規定要因ごとの影響―平均値の比較から―

進路意識と規定要因との関係について，まずは規定要因のカテゴリーごとに平均値を見て，それぞれの規定要因が意識にどのような影響を与えているかを検討してみよう。結果は表3-2～表3-9である。

学校内の要因から見てみよう。最初に「進路指導」である（表3-2）。「適性把握失敗」「自信」「現在志向」「好きな仕事に対するこだわり」で有意な差を見ることができた。この表からは以下の3つのことが指摘できる。第1に，何も参加していないという生徒では「現在志向」の平均値が.116となっており，現在志向が強くなる傾向が見られる。第2に，大学等の見学に参加した生徒では「適性把握失敗」が－.140，「現在志向」が－.161，「好きな仕事に対するこだわり」が.171となっており，それぞれ，適性把握失敗の傾向が弱く，現在志向である傾向が弱く，好きな仕事に対するこだわりが強くなるという傾向にある。指導を何も受けなかった生徒と比較すると，大学等の見学に参加した生徒は適性把握失敗や現在志向を回避できていることがわかる。第3に，職場体験学習は大学等の見学に比べると意識に対して特に影響は与えていない。以上をまとめると，職業や仕事あるいは将来生活への関心を高めるという進路指導の目的からすれば，受けなければ関心は低い

表3-2　進路指導経験別平均値 (+ p<0.1 * p<0.05　** p<0.01　***<0.001以下すべて同様)

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
0 何もやっていない	.036	-.084	-.046	.116	-.050	-.048
1 職場体験学習・見学のみ	.064	-.079	.050	-.028	-.046	.084
2 大学等見学のみ	-.140	.074	-.063	-.161	.171	-.001
3 大学・職場両方体験	.027	.076	.047	.031	-.029	-.014
合計	-.002	.011	.002	-.006	.009	.000
	+	+		**	*	

表3-3　学校ランク別平均値

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
0 ランク下位校	.088	-.063	.016	.059	-.060	.057
1 ランク中位校	-.156	.113	-.028	-.105	.107	-.102
合計	.000	.000	.000	.000	.000	.000
	***	**		**	**	**

ままであり，大学等の見学に参加することで現在志向を回避しているのだから，進路指導を通じての進路意識に対する働きかけはある程度効果があると見てよいだろう。

次に「学校ランク」による違いを見る(表3-3)。「メリトクラシーに対する親和性」を除いて有意な違いを見ることが出来た。それぞれのランクに特徴的な傾向として，この表からは次のようなことが読みとれる。まず，ランク下位校の生徒の特徴として，適性把握を失敗する傾向がある(.088)，自信や自己有能感が乏しい(-.063)，現在志向である(.059)，やりたい仕事に対するこだわりが小さい(-.060)，社会に対する不安を抱えている(.057)，という点が指摘できる。現在志向で適性を把握することがなかなかできず，その結果不安になったり，やりたい仕事へのこだわりが小さくて自信が持てなかったりしている生徒像が浮かび上がってくる。他方で，ランク中位校の生徒の特徴としては，適性把握失敗の傾向が弱い(-.156)，現在志向になる傾向も弱い(-.105)，自信や自己有能感はあって(.113)，不安が小さく(-.102)，やりたい仕事に対するこだわりを持っている(.107)，という点を指摘できる。このように，現在の高校生の進路意識においても学校ランクによる差を確認することができる。このことは，進路指導の立場からすれば，ランク下位校の生徒は進路意識という面で問題を抱えているということになる。進路指導を通じて意識に働きかけをすることは，ランク中位校よりもランク下位校において特に困難であることがここから読みとれる。

次に「高校での成績」である(表3-4)。「自信」「現在志向」「仕事へのこだわり」「不安」で有意な違いを見ることが出来た。成績の善し悪しと平均値の違いがもっともよく現れているのは「現在志向」である。成績の悪い生徒ほど現在志向の傾向があり(ずっとうしろのほう=.164)，反対に成績のよい生徒では現在志向の傾向が弱い(上位5番以内=-.132)。

ただ，これ以外の意識因子では，成績の序列と意識の強弱の間に一貫した対応関係を見ることはできない。たとえば，「自信」因子を見ると，クラスでうしろから10番くらいという生徒は-.104なのに対し，ずっとうしろのほうという生徒では-.029で，自信がないという傾向が弱まっている。たとえ成績がずっとうしろのほうであっても自信や自己有能感を失っているわけではないのである。そこで，ずっとうしろのほうと答えた生徒について他の意識因子を見てみると，「メリトクラシーに対する親和性」「不安」の傾向がそれぞれ弱い(-.078，-.158)。また，「好きな仕事に対するこ

表3-4　高校での成績別平均値

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
1　ずっとうしろのほう	.046	-.029	-.078	.164	-.111	-.158
2　うしろから10番くらい	.068	-.104	.060	.116	-.061	-.005
3　まん中くらい	.020	-.068	-.010	-.013	-.035	.013
4　10番くらい	-.086	.078	.072	-.099	.206	.150
5　上位5番以内	-.064	.216	-.007	-.132	.048	-.028
合計	.000	.001	.004	-.001	.004	.002
		**		**	**	*

表3-5　学校へのコミットメント（遅刻の頻度）別平均値

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
1　ぜんぜんしなかった	-.136	.040	-.079	-.271	.072	-.029
2　ほとんどしなかった	.044	-.084	.008	-.082	.001	.061
3　ときどきした	-.056	.008	.005	.009	.003	-.065
4　よくした	.091	.007	.033	.164	-.039	.036
合計	.000	.000	.000	.000	.000	.000
	*			***		

だわり」も小さい値を示している(－.111)。要するに，現在志向で好きな仕事に対するこだわりも持っていないけれども，メリトクラシーという学校的価値から離れたところにいるがゆえに，特に不安を感じず自信も喪失していないのである。学校とは距離をとって生活している様子がうかがえる。同様に，上から10番くらいの生徒も，好きな仕事に対するこだわりが強く自信もあるが，同時に不安も大きいという傾向にある。成績に関していえば，全体の中でどこに位置付くかというポジションによって，意識のあり方が変わってくるようにここからは読みとれる。

「学校へのコミットメント」はどうであろうか(表3-5)。遅刻の頻度による差をここでは見ているが，「適性把握失敗」と「現在志向」でのみ有意な違いを見ることが出来た。「現在志向」に関しては，遅刻の頻度が多いほど現在志向が強まり(よくした＝.164)，逆に遅刻が少ないほど現在志向が弱まる傾向にある(ぜんぜんしなかった＝－.271)。同様に「適性把握失敗」でも，遅刻を「よくした」とする生徒で適性把握失敗の傾向が強く(.091)，逆に遅刻を「ぜんぜんしなかった」とする生徒で適性把握失敗の傾向が弱い(－.136)。ただ，「適性把握失敗」と「現在志向」以外の意識因子に対しては影響を与えていないように見える。

次に学校外の要因について検討しよう。まず「学校外文化との接触」である。表3-1に示した合成得点は標準得点化したものであるので，この得点の正負で新たにカテゴリーをつくり，正の場合は学校外文化との接触が多く，負の場合は少ないと仮定して，その傾向を比較する。結果は表3-6である。これを見ると，「自信」「現在志向」「不安」の3つで有意な関係であることがわかる。それぞれ，学校外文化との接触が多い生徒で，自信があり(.137)，現在志向になり(.193)，不安が無くなる(－.050)という関係にある。

「アルバイト経験」についてはどうだろうか(表3-7)。ここでは，「現在志向」と「やりたい仕事に対するこだわり」において有意な差を見ることができる。それぞれ，アルバイトをしていない人の方が現在志向の傾向が弱く(－.103)，やりたい仕事に対するこだわりが小さい(－.117)。ただ，これとは逆に，アルバイトをすることが適性把握につながったりというような関

表3-6　学校外文化との接触

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
0　少ない	−.035	−.119	−.011	−.177	.003	.051
1　多い	.040	.137	.009	.193	.002	−.050
	.000	−.001	−.002	−.007	.003	.005
		***		***		+

表3-7　アルバイト経験の有無別平均値

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
0　していない	.027	−.047	.051	−.103	−.117	−.022
1　した	−.009	.015	−.016	.032	.036	.007
合計	.000	.000	.000	.000	.000	.000
				*	*	

表3-8　性別の平均値

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
0　男	−.024	.170	.042	−.042	.066	−.053
1　女	.018	−.168	−.038	.028	−.058	.070
合計	−.003	.003	.002	−.007	.005	.008
		***			*	*

係を，ここからはっきりと見ることはできない。適性把握につながる就労体験として高校生のアルバイトを位置づけることは，このデータからは難しいようである。

最後に属性的要因について検討しよう。まず，「性別」による違いはどうであろうか(表3-8)。ここでは「自信」「仕事へのこだわり」「不安」の3つで有意な差を確認できる。男子の方が自信を持ち(.170)，かつ仕事へのこだわりがあり(.066)，不安が小さい(−.053)。逆に，女子の方が自信がなく(−.168)，かつ仕事へのこだわりが少なく(−.058)，不安が強い。ただ，性別という要因は，我々が前節で核となる意識と名付け注目した因子への規定要因にはなっていないようである。

「家庭背景」では「自信」「メリトクラシーに対する親和性」「現在志向」「仕事へのこだわり」で有意な差を確認することが出来た(表3-9)。進学を望まない家庭に着目すると，そのような家庭の生徒は，現在志向の傾向が強く(.174)，好きな仕事に対するこだわりが小さくて(−.128)，自信も持っていない(−.135)。進学を望まないということが家庭の経済的余力の乏しさを意味しているとするならば，ここに示された生徒像も了解可能である。つまり，高校卒業後は進学せずに社会に出なくてはならず将来よりも今に関心が向く。また，とにかく働かなければならないのでどんな仕事でもこだわり無く就く用意がある，ということになるのであろう。

以上をまとめると，進路指導や学校ランクといった学校内の要因において意識に与える影響が見られたが，同時に，学校外文化や家庭背景といった学校外の要因・属性的要因でも影響は見られた。平均値の比較を見る

表3-9　家庭のタイプ別平均値

	「適性把握失敗」第1因子	「自信」第2因子	「メリトクラシーに対する親和性」第3因子	「現在志向」第4因子	「好きな仕事に対するこだわり」第5因子	「不安」第6因子
0　希望不明な家庭	.055	-.073	-.180	.031	-.115	-.090
1　進学望まない家庭	.110	-.135	-.068	.174	-.128	.054
2　進学希望の家庭	-.041	.059	.064	-.054	.058	.004
合計	.002	.002	.000	.002	-.005	-.001
		*	**	**	**	

表3-10　進路意識の規定要因　（重回帰分析：標準化回帰係数）

	適性把握失敗	自信	メリトクラシーに対する親和性	現在志向	好きな仕事に対するこだわり	不安
学校ランク	-.110 ***	.102 **	-.017	-.068 *	.072 *	-.099 **
成績	-.023	.137 ***	.041	-.015	.086 *	.062 +
遅刻の頻度	.059	-.047	.079 *	.071 +	-.038	.076 *
進路指導（職場体験学習等経験あり）	-.001	.030	.046	-.060	.009	.035
進路指導（大学等見学経験あり）	-.042	.058	-.035	-.053	.082 +	.015
進路指導（体験学習・見学経験ともに経験あり）	.001	.066	.027	-.021	-.006	.008
アルバイト経験の有無	-.067 +	.018	-.046	-.078 *	.135 ***	.037
学校外文化との接触	.028	.236 ***	-.012	.260 ***	.012	-.122 **
性別	.042	-.198 ***	-.035	.055 +	-.104 **	.076 *
進学望まない家庭	.024	-.032	-.076 *	.069 *	-.051	-.008
希望不明の家庭	.023	-.042	-.116 **	.019	-.061 +	-.046
調整済み決定係数	.017	.098	.015	.094	.037	.027

+ p<0.1 * p<0.05 ** p<0.01 ***<0.001

限りでは，生徒の進路意識に与える影響は，進路指導をはじめとした学校との関わりと，生徒が置かれている社会的な環境の両方からもたらされているということがわかった。

(2) 進路意識の規定要因—重回帰分析—

前項の分析では，個々の規定要因がそれぞれ意識にどのような影響を及ぼすかを考察してきた。そこで次に，これらの規定要因が，お互いの影響力を統制した場合にどのような独自の効果を発揮するのか，という点を分析しよう。用いる方法は重回帰分析である。結果は表3-10に示した。

まず，核となる意識と名付けた意識因子の規定要因を順番に検討していこう。「現在志向」だが，この因子に対して影響を与えている要因でもっとも目立つのは，1％水準以下で有意な関係にある「学校外文化との接触」である。これは，学校外文化との接触が多いほど現在志向が強まるということを意味しており，学校内の要因や生徒の属性的要因を統制してもなお，学校外文化が独自の効果を持って生徒を現在志向に導いているということを意味している。標準化回帰係数を見ても，学校外文化の値は学校内の要因で有意な関係を示している遅刻の頻度よりも大きく，影響力の強さが伺える。なお，他にも「学校ランク」「アルバイト経験の有無」「性別」「進学を望まない家庭」という要因が有意に関係していて，それぞれランク下位校において，アルバイト経験が無い生徒，女子生徒，進学を望まない家庭の生徒で，現在志向の傾向が強いというように読

みとることができる。

次に「適性把握失敗」を見ると，1％水準で「学校ランク」が有意な関係を示している。低い学校ランクの生徒は適性の把握が弱い傾向にある。下位校に特有の問題，すなわち進路を水路づけるような雰囲気が学校全体に乏しいというような学校内の要因が，それ独自の効果でもって，生徒の適性把握に影響を与えていると考えられる。また，10％水準まで含めればアルバイト経験の有無も有意な関係にあるが，他方で，「性別」や「家庭背景」といった属性的要因は有意な関係を示しておらず，学校外の要因についても，「学校外文化との接触」は有意な関係を示していない。調整済み決定係数も.017と低く，「学校ランク」や「アルバイト経験の有無」以外の変数は，「適性把握失敗」を説明するのに成功していないことがわかる。

「メリトクラシーに対する親和性」因子についてはどうか。ここでは「希望不明の家庭」で有意な関係を示しており，そのような家庭の生徒はメリトクラシーに対する親和性が低くなるということを意味している。また，進学を望まない家庭でもメリトクラシーに対する親和性が有意に低い。ただ，ここでも「適性把握失敗」因子と同様に調整済み決定係数の値は.015と小さく，他の変数はこのモデルを説明するのに成功していないことが読みとれる。

以上，意識構造の核にあたる意識因子の規定要因を1つずつ確認してきたが，ここで規定要因の側に視点を移して全体をまとめよう。すなわち，どの規定要因が幅広く意識構造を規定しているかということである。表3-9を見ると，5％水準で有意な関係に限定をすれば，「学校ランク」が「メリトクラシーに対する親和性」以外の全ての意識因子に対して規定要因となっており，ついで「学校外文化との接触」と「性別」が3つの意識因子に有意な関係を示している。ただ，これと対照的なのは，進路指導の効果である。「好きな仕事に対するこだわり」で「大学等見学」のみが有意な関係を示しているが(見学したほどこだわりが強い)，それ以外では有意な関係が見られなくなってしまった。確かに，現在行われている体験学習を通じての進路指導が方法的に妥当ではなく，もう少しやり方を工夫すれば進路意識への働きかけも可能なのかもしれない，という反論も可能だろう。だが，少なくとも現在のやり方では進路指導の進路意識に対する影響力は小さいということをこの結果は物語っている。

C　小括

この節では，2つの視角から普通科進路多様校に通う生徒たちの進路意識の規定要因に着目した。どのような要因がどの程度進路意識に影響を与えているかという問いに対しては，以下のような点が明らかになった。すなわち，重回帰分析を行った結果，核となる意識因子についてはそれぞれに規定要因が違って，①「現在志向」は「学校外文化」によって大きな影響を受けているということ，②「適性把握失敗」については「学校ランク」が主な規定要因になっていること，③「メリトクラシーに対する親和性」については「家庭要因」が影響を及ぼしていること，という点である。前節で進路決定の有無を決めるとされた「現在志向」は，学校外文化の影響を強く受けているのであった。また，規定要因の側に視点を移せば，「学校ランク」や「学校外文化との接触」が高校生の進路意識を幅広く規定している反面，進路指導や高校での成績，学校へのコミットメントといった学校内の要因は必ずしもすべての意識因子で有意な関係を示しているわけではなかった。とりわけ，進路指導については，平均値の比較では意識に影響を及ぼしているように見えたが，他の要因をコントロールした重回帰分析においては，一部を除いて有意な効果が見られなかった。

以上の分析結果によれば，普通科進路多様校においては，進路指導を通じての進路意識に対する働きかけが必ずしも十分な効果を発揮していないと言わざるを得ない。特に，進路指導の入口の場面，すなわち高校生に将来のことを考えさせる＝現在志向から脱却する，という点においては，学校外文化が大きな影響を及ぼしていることが本節の分析でわかった。前述の通り，進路指導の方法的妥当性の問題が残されてはいるが，より効果のある進路指導の方法を模索するにしても，こうした学校外文化の影響を無視することはできない。「将来に対する関心の高まり→適性把握→自己決定」という手順を今後も進路指導が求めるのであれば，学校外文化の中で現在志向に浸っている生徒達に，どのような方法をとれば将来のことを考えさせることができるかが問われていると言えよう。さらに踏み込んで指摘をするならば，「将来に対する関心の高まり→」に始まる一連の手順を踏まず，仮に現在志向であっても適性だけは把握させるといったような，これまでとは違った進路指導の枠組みを柔軟に考える必要性があることを示唆しているとも言えよう。

（大島真夫）

4．進路指導に乗れないメカニズム―インタビューデータからの分析―

A　問題設定

本節の目的は，おもに進路多様校で実施されている進路指導の状況と教師が認識している生徒の進路意識の関係性についてあきらかにすることである。これまでの研究(苅谷他2001)では生徒の自己理解を促すための進路指導の早期化・統合化が必ずしも効果的でないことがあきらかにされた。しかし，その原因についての検討は十分されてはいない。つまり，単なる早期化された進路指導ではそれに乗り遅れる生徒の問題や，統合化によって従来は個別的な対応を担っていた担任が進路指導部主導の全体的な進路指導計画に組み込まれていく可能性については指摘してきたが，そもそも指導に乗れない生徒が生じる原因や，全体的な指導では自己認識できずに個別化した対応でしか進路を選択できない生徒が生じる原因についての具体的な検討はなされていない。

そこで本章では，第3節において統計的手法を用いて析出された「現在志向」「適性把握失敗」「メリトクラシーに対する親和性」といった高校生の進路意識規定要因を，インタビューデータ分析の視点とし，進路指導の早期化・統合化による効果を減衰させる阻害要因について検討する。さらに早期化・統合化された進路指導に乗り切れなかった生徒がどのように処遇されるかについてもあきらかにする。

調査は，質問紙調査実施校のうち，A高校，B高校，C高校，D高校，F高校の5校の進路主任または担当者に対して，2002年4月から8月までの間におこない，進路指導状況とその効果や問題点，教師が高校生の進路意識をどのように認識し何を問題視しているのかについてインタビューにより実施した。

B　分析

(1)　先を考えずに努力しない生徒

「現在志向」については，調査対象校が普通科進路多様校であることから，いずれの学校でも生徒の特性として，将来のことを考えない時間展望のあまりない生徒が多いと指摘されていた。その具体的なイメージとしては勉強が好きでないアルバイト熱心な生徒像ということだった。そのような将来のことを考えない生徒のために，表4-1に示すように，各高校は1年時から将来の進路を考える様々な方策をとってきた。

しかし，各校ともとりくみの効果については一部の生徒に対する限定的なものであったり，そのときだけの興味の喚起にとどまると述べており，早期からの進路指導が必ずしも有効でないことを示している。このことは，そもそも将来のことをあまり考えない「現在志向」に生徒が至る原因の解消の必要性を示唆している。たとえばB高校では次のような困難さが指摘されている。

「1年で，これきっと総合的学習にもまた来年から取り入れると思うんですけど，進路研究って授業をやってるんですよ，1年生で。例えば，求人票の読み方なんかも勉強するし，あと先輩来て話したりとかね，そういうのもいろいろ週1時間ですけどもやってるんですよね。企業見学，インターンシップまでちょっと届きませんけど，本当に工場見学みたいなこともしてるんですけどね。動機付けをしてるんですけど，なかなか。だから，就職率が上がったということもないし」(B高校)

動機付けに向けて1年時からやれることは何でもや

表4-1　将来の進路を展望させるとりくみ

高校名	とりくみのおもな内容	効　果
A高校	LHR での人生設計、費用面からの関心喚起 フリーターが不利な点についての指導	その時は驚く
B高校	学期毎の3者面談の実施。学校設定科目による週1時間の進路研究実施（必修）	生活指導が優先
C高校	選択科目のなかに適正把握に向けてのガイダンス科目を設定	未決定者は増加
D高校	1 年時からの進路指導の実施。専門学校の模擬授業や外部での体験学習の実施	未決定者は横ばい
F高校	クラス担任や教科担任による 1 年時からの個別相談や情報提供	教師の対応により差がある

ろうという様々なとりくみがなされており，見学や実習などでは日頃，学習に目を向けない生徒でも積極的に取り組む姿がみられるが，その場だけの楽しさや興味で終わってしまい，それが必ずしも本人の進路意識の向上に転化されることはないというのである。就職活動の方法についての学習や就業体験といったものは，将来は進路先として就職したいという動機がすでにある場合に有効なのだろうが，もともと「現在志向」の強い高校生にとっては，普段のつまらない授業よりはましな暇つぶしの時間のように思えるのではないだろうか。

一方，「メリトクラシーに対する親和性」についても，調査校のすべてにおいて努力しない生徒，あきらめきってしまっている生徒が多いことが指摘され，例えばそのことを「ここに来る生徒たちは，自分たちはばかだと思っている。それを大きな声で人に話をして，『分からない』と。逆に，それで多分，身を守っているんですけれども，彼らは。ですから，常に『おまえたちはできない』とか，『そんなことも分からないのか』とかと言われ続けてきて，もうそれで固まっている生徒」(D 高校)と表現している。ここにもメリトクラシーから離脱する要因が存在し，そこにからめとられている生徒の姿をみることができる。

それでは，進路担当者は進路多様校において生徒が「現在志向」を維持し「メリトクラシーに対する親和性」を拒否する要因として何を捉えているのであろうか。インタビューからは，保護者の教育に対する意識と経済状況を最も大きな要因として指摘している。

「とにかく卒業させくれればいいと思っているのかな。……特徴といったならば，子どものことどころじゃないのかなって，親のほうも何か生活が精一杯で，子どもはもちろん。だから，保護者だから養っているのかちょっとそれもね，どこまでちゃんとめんどうみているのかわからないし。ほんとうにぎりぎりなのでそれどころじゃないって。どうしても子どもの教育とかなにとかってね，やっぱ最後に持っていかれちゃいますもんね，本当に生活困ってたら，恐らくね。」(B 高校)

「保護者と面談しててもそうなんですよ。『来年の4月にお子さんも卒業すると学生じゃないんですけど，ずっとうちに寝ててもよろしいでしょうか』『それは困るんですけれど』『じゃあ，どうしますか』『とにかく卒業してもらったあと，仕事探してもらわないと』『で，ずっとおうちの方の保険証でもよろしいんでしょうか」「いや，いつまでもそうはいかないと思います』『そのまま結婚しちゃうかもしれないんですけど，いいんでしょうか』『それも困るし』っていうようなのが，これも生徒も保護者も同じ家庭の場合があるんですよね。」(A 高校)

このような子どものことどころではなかったりどうしていいか困惑する保護者の状況に対して，1年時からの保護者対象の進路説明会の開催や奨学金制度の紹介などを対策として実施している。しかし，進路説明会の参加者は少数にとどまり，しかも参加した保護者は進路意識の高い保護者であったり，奨学金については融資基準自体に達しなかったり，なんらかの事情により授業料減免の書類自体提出できない状況があるというのである。保護者の子どもの進路に対する関心の低さと経済状況の厳しさは，奨学金などの支援制度の利用を困難なものとし進学する道を閉ざすように作用し，基本的には就職へ水路付けられる。ところが保護者が無関心である場合は，さらに正規就職についても保護者の意向が弱いために最後まで未定となったり，フリーターという進路を選択することを許容することになる。

(2)　自己理解と適性把握のパターン

現在の進路指導においては，進路選択の前提になる自己理解とそれにもとづく適性把握といった順序性が重視され，進路指導の役割は生徒が自分自身で自己決定するまでのサポートであるとされている。このことを生徒の側からみると，スケジューリングされた説明会やガイダンスにあわせて，繰り返し実施される希望調査や面接を通じて自己の進路を自分で決定していく過程を経験していくことが要求されるのである。

ところが，進路多様校においては，前節で述べたように様々な要因から，将来のことを考える余裕がなかったり，努力することが無駄なように考えている生徒が少なくない。そのような生徒たちは，何の準備もしないうちに進路選択の時期を迎えてしまって何をしたらよいか迷う場合とある程度の進路研究をした上で選択に迷う場合について述べている。

「生徒のほうが「ぜひ，この企業に行きたい」，「こういう仕事がしたい」というふうに言えないのです。「僕は何をしたらいいか」とか，「私に向いている仕事があったら教えてよ」とか，そういうふうに言うもんですから。ましてや，具体的な企業名を挙げることもできな

い，……」(D 高校)

適性把握が進路決定の前提にあるので，適性把握ができなければ自分に向いている仕事を考えることはできなくなり，向いている仕事がわからなければ求人票から企業名を決定することもできない。また，仮に自分に向いている仕事がわかっても，その求人がきていない場合には企業名を決定しようがない。現在の進路指導の枠組みはこのように二重の構造で企業名の決定を困難にしている。

さらに，大手企業の求人はごく少数にとどまる。はじめて名前を聞く企業からの求人票をもとに，どの企業に行きたいかを決めることは現実的にかなり困難である。にもかかわらず，「私はこの会社が自分にあうと思うので就職を希望します」という自己決定が要求されるのである。教師の指示通りにきちんとできる生徒と，あまり深く考えずに決められる生徒は，こうした自己決定の要求に応えることはできるが，多くの生徒は悩みながら決定することになる。

「何か情報がたくさん今あふれちゃってますからね。けっこう何かいろんな情報雑誌や何かのコマーシャルでやりたいことを探すとか，転職だとかって，そういう言葉に若干振り回されちゃってるのもあるのかもしれない。突き詰めていくと，本当にやりたい仕事っていうのがないんですよね。」(A 高校)

進路選択に際しての進路指導においては自己決定のために様々な情報提供をおこなっている。例えば進学にしても複雑化しているので学校は，進学情報を専門に扱う業者に説明会を委託したりしている。このような場では進学先のよいイメージが提供されるし，会社の説明にしても人材確保の面からの魅力的な情報が提供される。進路指導部はそれに対して取得資格や企業の将来性について，なるべく客観的な情報を提供しようとするので，生徒には様々な情報が提供され，結局のところどの情報にもとづいて自己決定していいのかがわからなくなるという状況もみられるのである。

(3) 最終的な自己決定の要求

調査対象となった進路多様校では，1節で述べたように各学校ごとに工夫した方法を用いて1年時から，早期化・統合化された進路指導を展開している。しかしながら，現実には質問紙調査の結果からもわかるように，3学年になってもいつまでも進路を決めない生徒が少なくない。それらの生徒に対しては全体的な指導やスケジューリングされた対応ではなく，個別的な進路指導がなされることとなる。また，自己の適性把握した結果にもとづき進路希望しても，出欠席の状況や経済状況から断念せざるをえないようなケースについても個別的に進路指導がおこなわれる。この最終段階における個別化された進路指導においても自己決定原則が維持される。

「あんまり放っておかれちゃう子っていうのはいないんですよ，少ないから。結局ね，たくさんやめちゃうんですよね。40人，1年生入ってきて，今，29人とかなんですよ，3年。1クラス，30人とか29とかそのぐらいなんですよ。すごく少ないんですよ。だから，少ないのも困るんですけど，ただ，目は行き届きますよね。だから，あんまり放っておかれちゃう子はいないんですよね，……でも，そういうのを拒否しちゃう子もいるしね。何か自分の世界に入っていて，もう何か言われても聞いてんだか何だか分からないみたいな子もいますけどね。」(B 高校)

進路多様校においては退学者が多いこともあり，物理的に進路指導の対象となる生徒が少ないので，個々の生徒の状況を教師は把握しやすく，個別的な働きかけにより進路指導をおこなうことができる。しかしながら，そのような個別的なかかわりにおいても教師に対して拒否的な生徒については，それ以上の指導は困難で結果的には放置せざるを得ないのである。

「こちらで言っちゃいますね。必要だと思ったら。授業担当とかそういうこともありますからね。授業で接することもあるから，そういう生徒と。だから，実際ありますね。「どうするの？」って授業中に(笑い)……「どうするの？もう何か，うだうだ，うだうだしててどうすんの？」と。(笑い)」(B 高校)

進路指導部が組み立てた統合化された進路指導のプロセスから外れた生徒の対応は，従来から個別化され，おもに担任が生徒に対する声かけや面接の中で進路意識の向上をはかりながらおこなわれてきたが，いつまでも指導に乗らない生徒に対しては，「どうすんの？」と自己決定を迫ることとなる。ここで，最終的に進路指導に乗るチャンスが与えられるが，多くの生徒の場合，自分にとっては突然せまられた自己決定のチャンスを生かすことができずに，進路未決定へと水路づけ

られることとなる。

「確かにやる気だけ管理しておいて，実は入学さえ難しいだろうっていう生徒もいます。例えば美容師の専門学校なんかですと，欠席が30日もあるような生徒は入れてくれませんので，もう30日以上休んじゃっている生徒にとっては，せっかく美容師になりたいと思っても，そういう入試の段階で全部はねられちゃう。「何だ，やっぱり駄目なんじゃない」ってへこんじゃう生徒が，今の子供の言葉で言えば「へこんでしまう」わけです。で，「どうするの」と言うと，「じゃ，やっぱりフリーターでいいよ」と，こうなってしまう。こういう例は確かにあります。」(D 高校)

たとえきちんと適性把握をしても，学力，出欠状況，学費などの諸要因から希望する進学先や，就職先に合格できないことも現実には少なくない。適性把握について希望する進路先に合格できないことは，もともと適性がなかったとする捉え方もあるが，実際に進路先を失った生徒にとっては大きなショックであり，現実的な対応を迫られることとなり理論的には再度，適性把握をおこない進路先を変更することであるが，そのプロセスは本人にとっては厳しいものであると推測される。ここで，再チャレンジの具体的な方策の提示もないまま「どうするの」と自己決定を迫られれば，自己解決できずにやはり進路未決定へと進まざるを得ない可能性も大きい。

(4)　進路未決定の承認

進路多様校では，進路未決定者を多く出している現状について，学校における教師の指導や生徒の努力ではどうすることもできない外的要因が存在することを指摘して，進路未決定者がでることを不可避なことと捉えることとなる。

「絶対，先生って上からしゃべりますよね，進路に関して話すときって。そうすると，やっぱり『世の中の景気が悪いから就職ないんだぞ』とかね，『そんな無目的で行くと何とか…』，……(略)……何ていうのかな，悪い言葉で言うと卑屈になっていく子が多いかもしれない。だから，そういう，本当ね，われわれ注意しないといけないという，思ってるんだけど，やっぱりつい言っちゃうんですよね。『今日，求人票来ねえぞ。景気悪いから。そんなじゃおまえ就職できねえな』なんて話をちょっとぽろっとしちゃったりする。そういった何か擦り込んじゃっているようなところが，もしかしたらあるかもしれない。」(F 高校)

進路多様校では進路指導というよりは進路にからめた生徒指導的な生徒に対する働きかけが，進路選択をあきらめさせる作用として機能する可能性を指摘しているが，その結果，生じるであろう進路未決定者についてもある程度はしかたのないものとされる。

「大学受験なんかでも，冒険しなくなったとか，まあ一概には言えないけど，そんなことを言われるようになってきているけど，特にこういう学校なんかそういうのが顕著に悪い面で出ちゃうような気はしますよね。世の中の悪いって言われていることは何か全部背負っているような，何かかわいそうな気がするんですけどね，僕はね。悪いって，こっちの子にとってみればそりゃ確かに悪いかもしんないけど，いいところでもあって，力があればそれはそれなりにいいところにできる。でも，何か全部そういう悪いところを引き受けちゃって，引き受けちゃってって，わざと引き受けているわけじゃないけど，結果的に引き受けちゃっているような気が時々して切なくなるときがありますね。」(C 高校)

生徒が自由に進路選択するための学力，出欠席状況，家族の支援と経済力など様々な諸条件について不利な立場に置かれている生徒が進路多様校には割合として多く，そのことが一種の不幸な生徒が多い学校像として形成されている。その結果「うちの学校は」いろいろ事情がある生徒が多くて，進路選択もすんなりとは決まらないものだという意識形成がなされることとなる。

C　小括

現在，多くの高校では進路指導の早期化・統合化が展開され，高校1年時から何らかのとりくみがなされている。その多くは従来は3年時に集中していた指導内容を早期化するとともに学年担任が進路部と協力して1年次から計画的に指導する統合化することを内容としている。この進路指導の枠組みは目標とする進路先は異なるものの，進学校・進路多様校，普通科・専門学科を問わず同様である。

このなかで進路多様校においては，まさに進路が多様であることから入学時の生徒の意識からして，進学校であれば進学，専門学科であればとりあえず就職といった構えをもって入学してくる生徒が多いという場

合とは対照的である。進路多様校では「高校はいるの精一杯，入ったら卒業するのが目標」(C 高校)という生徒が少なくない。さらにはそのようななんとか高校にはいれた生徒に対しても，「とりあえず高校を卒業した段階でフリーターになるしかないだろうみたいな……これはやっぱり社会全体が，学校の教員もそうですけど存在を許しているわけです」(C 高校)といった社会的なまなざしを教師がもっている。このようなまなざしを受けた生徒に対しては「遅刻に対しても何に対しても，まず第一に学校に行くこと自体，そんなに規範力というか規制力が弱まっています」(C 高校)といったような処遇がおこなわれ，結果として多くの中途退学者をだしてしまうのである。

しかし，一方において進路多様校では，「進路指導以上に，とにかく生徒指導が必要」(D 高校)とされ，学校生活の全般にわたって生活指導がおこなわれていることが，学校要覧などから確認される。つまり，もともとそれほど高校にくる明確な目的をもたずに入学し，生徒自身の学校に対する規範意識も低下している状況において，校則の遵守といった全体的な生徒指導がおこなわれていることになる。

このような状況のなかで，進路指導部がおこなう早期化・統合化された生徒全員を対象にしておこなう進路説明会やガイダンスは教師側が意図する効果を必ずしも挙げていない。そのことを教師自らがみとめている。具体的なとりくみのなかでは体験や見学などで，普段やる気がない生徒がやる気をみせたというような成果は個別的に認められるが，進路意識向上への効果は限定的である。

教師側の意識としては，学校側の進路指導に生徒が乗らない要因としては，嫌ならいくら遅刻してもいいというような，とにかく今のことしか考えられない志向性と学習をはじめとする何事にもやる気のない志向性を指摘して，このような生徒の意識は進路選択の先送りを促しているとしている。さらにこの生徒自身の進路意識の遅延を助長する背景が，保護者の養育態度や経済状況であると指摘し，教師側が三者面談など個別的に進路指導しても保護者の方が経済的な理由などから進路選択をやめてしまう状況が確認された。

以上の検討から，つぎのことを結論として導くことができる。第1に進路多様校においては生徒自身の心的状況が進路意識形成以前の段階であったり，生徒を取り巻く状況が本人の意志ではどうにもならないような要因が存在している。第2に，にもかかわらず，すべての生徒が1年時の早い段階から，自己理解→適性把握→進路選択，といった自己決定プロセスに乗って進路決定することが要求されている。ところが，第3に進路多様校においてはそのことのひずみが進路指導に乗れない生徒として表出する。彼／彼女らは個別的な進路指導を受けることになるが，ここでの指導原則も自己決定が優勢であるために，阻害要因を自己解決できない場合には進路未決定へ導かれることになる。しかも，第4に，このように進路未決定者を析出するメカニズム自体は，個人の個別的な事情として承認されているのである。

（千葉勝吾）

5．「進路えらび」と進路意識の関係

本節では，これまで検討してきた進路意識が生徒の進路選択とどのような関係にあるかについて分析を行う。すでに第2節　B　高校生の意識タイプと進路において，因子分析によって抽出された意識因子と進路の関係について仮説的に検討を試みたところであるが，本節では多変量解析を用いて意識以外の要因を統制しながら両者の関係を明らかにしたい。

A　「進路えらび」をしない生徒

表5－1に示すように，今回のわれわれの調査対象となった進路多様校では，就職試験を受ける，大学等の入学試験に出願・受験をするなど，就職や進学のための実質的な活動を全くしないままフリーターあるいは進路未定者として卒業を迎える生徒が全体の15%にも及ぶ。もちろん就職・進学に向けて活動を行ったものの就職内定あるいは進学先決定に至らない生徒も存在する。近年の厳しい高卒労働市場の状況を鑑みれば，内定を得られず途中で就職活動をあきらめてフリーターになる者，卒業間近になっても就職先が決まらない者が少なからず現れることはやむを得ないのかも知れない。進学の場合も，そのほとんどは推薦入学であるため，いわゆる進学校とは事情は異なるものの「浪人生」となる者が存在しても不思議ではない。しかし，フリーターあるいは進路未定者として高校を卒業する生徒の多くは，進路のための実質的な活動を全くしなかった生徒で占められていることを表5－1は示している。

そこで本節では，進路のための活動を「何もしない」生徒に焦点をあてることにしたい。実際の進路（結果として）の「未定」，あるいは進路希望調査等に現れる単なる「希望」よりも，実質的な進路活動の有無，すな

表5-1　進路のための活動と実際の進路（全体に対する%）

		進路のための活動				
		就職	専各	大学・短大	何もしない	合計
4月からの進路	正社員として就職	17.0	-	-	-	17.0
	大学・短大に進学	-	-	28.7	-	28.7
	専各に進学	-	27.2	-	-	27.2
	アルバイト・パート	3.8	1.0	-	11.0	15.7
	その他	-	.3	-	.9	1.1
	未定	2.1	.8	3.4	3.9	10.2
	合計	23.0	29.2	32.1	15.7	100
	(N)	(241)	(307)	(337)	(165)	(1050)

わち進路決定のプロセスにおける「何もしない」という選択に着目した方が，進路意識との関係をより明瞭に把握できると考えるからである。

それにしても何故これらの生徒たちは「進路えらび」を放棄してしまったのか。それとも進路のための活動を行おうにもそれが不可能な背景が存在していたのか。そこに進路意識はどのように介在しているのか。進路のための活動を「何もしない」生徒が，他の進路（就職・進学）を選択して活動を行った生徒と比較していかなる特徴を有するのかを分析することにより，上記の点を明らかにしたい。

B　分析—進路活動をしない生徒の特徴

(1)　属性的要因の影響（クロス集計分析）

進路選択と意識の関係を分析する前に，生徒の属性的要因が進路選択にどのような影響を及ぼしているのかをクロス集計表によって確認しておきたい。ここで着目する属性的要因とは，学校ランク，性別，家庭の経済的状況の３つである。これらはいずれも，高校入学後に生徒が自ら変更することができないという点で「属性的」要因といえる。ただし家庭の経済的状況については前節と同様に，親の進学に対する希望をその代理指標として用いた。

表５-２，表５-３は親の進学に対する希望によって進路活動（選択）がどのように異なっているのかを，それぞれ学校ランク別，男女別に示した三重クロス表である。ここから以下の５点を指摘しうる。まず，親の進学に対する希望による影響を無視（表の右側の合計欄に着目）すると，(1)学校ランクによって進路選択は大きく異なっている。中位校に分類した高校では約85%が進学を選択しており，就職を希望する生徒はきわめて少ない。また「何もしない」生徒の比率は中位校では８%であるのに対して，下位校では20%に及んでおり，「何もしない」生徒はやはり下位校に偏在している。(2)性別による違いをみると，就職，専各を選択する割合は男女でほとんど差がないのに対して，「何もしない」者の割合は女子で高く，その分だけ男子では大学・短大の割合が高くなっている。(3)親の進学に対する希望による影響をみると，親が進学を望まない場合には，就職を選択する者の割合が高くなる。そこには経済的理由から就職せざるを得ない状況が存在していると考えてよいだろう。(4)親が進学を望まない場合，進学の選択肢はあらかじめ除外されてしまうため，「何もしない」生徒の割合も高くなる。親が進学を望んでいるかどうかわからないとする生徒についても同様の傾向が確認される。(5)親の進学に対する希望の影響は学校ランク，性別とは独立に働いている。ただし，進学を望まない家庭は下位校，女子に多いことから，これらのカテゴリーに属する生徒の「何もしない」率は，３つの属性的要因が重なってさらに高くなると考えられる。

(2)　属性的要因の影響（多項ロジット分析）

進路選択（活動）に対する基本的な属性的要因による影響を俯瞰したところで，ここからは，上記の属性的要因に加えて「適性把握失敗」，「メリトクラシーに対する親和性」，「現在志向」の各進路意識が，進路選択に対していかなる影響を及ぼしているのかについて多項ロジット分析を用いて検討する。

多項ロジット分析とは，３つ以上のカテゴリーからなるカテゴリカルな被説明変数に対する回帰モデルで，説明変数（群）の水準によってどのカテゴリーが選択されやすいかを予測するものである。一般的には基準となる１つのカテゴリーに対してその他のカテゴリーが選択される確率（対数オッズで示され，baseline category logit と呼ばれる）の変化に対する，各説明変数の影響力（パラメータ）が推定される。

ここでの分析では，「何もしない」を基準のカテゴリーとして，他の進路（就職，専各，大学・短大）を選択した者との間で算出される対数オッズ（ロジット）が，説明変数１単位の変化によって，どの程度変化するのか

表5-2　親の進学に対する意識 と 進路活動（学校ランク別、%）

		親の進学に対する意識			
		望まない	わからない	望む	合計
下位校	就職	54.6	33.3	21.5	31.0
	専各	13.8	24.3	31.7	26.4
	大学・短大	5.3	15.3	30.4	22.2
	何もしない	26.3	27.0	16.3	20.4
	合計	100	100	100	100
	(N)	(152)	(111)	(404)	(667)
中位校	就職	31.8	11.1	5.3	7.7
	専各	27.3	35.2	35.2	34.7
	大学・短大	18.2	37.0	54.5	49.9
	何もしない	22.7	16.7	5.0	7.7
	合計	100	100	100	100
	(N)	(22)	(54)	(301)	(377)

表5-3　親の進学に対する意識 と 進路活動（男女別、%）

		親の進学に対する意識			
		望まない	わからない	望む	合計
男子	就職	50.0	31.4	15.0	22.0
	専各	22.4	26.7	31.1	29.3
	大学・短大	5.2	22.1	45.8	36.9
	何もしない	22.4	19.8	8.1	11.8
	合計	100	100	100	100
	(N)	(58)	(86)	(347)	(491)
女子	就職	53.5	21.6	13.6	22.9
	専各	12.1	31.1	34.5	29.4
	大学・短大	9.1	21.6	37.0	29.0
	何もしない	25.3	25.7	14.9	18.6
	合計	100	100	100	100
	(N)	(99)	(74)	(316)	(489)

を推定する。学校の成績を例にとれば，成績が1段階上昇することにより，就職，専各，大学・短大という選択肢が，「何もしない」という選択肢に対して，それぞれどれくらい選択され易くなるかを成績のパラメータが示していると考えればよい。ここで，統計的に有意な効果を及ぼす要因(説明変数)を探ることにより，進路のための活動を「何もしない」生徒が，他の進路のための活動を行った生徒と比較して，相対的にどのような特徴を有するのかを明らかにすることができるのである。

それでは，分析に使用した変数について説明しておこう。被説明変数は前述のとおり，「就職」，「専各」，「大学・短大」，「何もしない」の4つのカテゴリーからなる進路のための活動で，「何もしない」を基準のカテゴリーに設定した。

説明変数については，前項でも検討した属性的要因，すなわち学校ランク(中＝0，低＝1としたダミー変数)，性別(男子＝0，女子＝1としたダミー変数)，親の進学に対する希望(「望む」を基準カテゴリーにした2つのダミー変数，「望まない」と「わからない」)に加え，進路選択に影響を及ぼすと予測される要因として，成績(上＝5～下＝1までの5段階)，高校3年生になってからの欠席日数を用いた。なお，欠席日数については無回答者が多かったため，「10日未満」を基準にして，「10日以上」と「無回答・不明」の2つのダミー変数を作成した。変則的な処理ではあるが，無回答者を欠損値として分析から除外してしまうと，サンプル抽出に歪みを生じると判断し，このような処理を施した。

進路意識については，因子分析によって算出された

表5-4　進路選択に関する多項ロジット分析（パラメータ推定値）

		就職		専各		大学・短大		（何もしない）
		B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	
（切片）		.944*		1.641**		1.511**		
性別	女子	-.420+	.657	-.448+	.639	-.879**	.415	-
	男子	-	.	-	.	-	.	-
親が進学を	望まない	.578**	1.782	-1.313**	.269	-2.359**	.095	-
	わからない	.039	1.040	-.725*	.484	-1.167**	.311	-
	望む	-	.	-	.	-	.	-
ランク	下位校	.642+	1.899	-.875**	.417	-1.444**	.236	-
	中位校	-	.	-	.	-	.	-
欠席日数	"無回答・不明"	-1.778**	.169	-1.116**	.328	-2.363**	.094	-
	10日以上	-1.604**	.201	-1.483**	.227	-1.981**	.138	-
	10日未満	-	.	-	.	-	.	-
高校の成績（5段階）		.027	1.027	.408**	1.504	.738**	2.092	-
進路意識	適性把握失敗	.030	1.031	-.473**	.623	.130	1.139	-
	メリトクラシー	.349*	1.418	.339*	1.403	.328*	1.388	-
	現在志向	-.451**	.637	-.319+	.727	-.556**	.573	-

Model Chi-square=502.5, DF=30, p=.000
** : p<.01, * : p<.05, + : p<.10

「適性把握失敗」，「メリトクラシーに対する親和性」，「現在志向」の各因子スコアをそのまま用いている。

分析の結果は表5-4に示した。モデル全体の適合度は良好であるとみてよいだろう(Pearson カイ2乗値＝2710.1，自由度＝2721，有意確率＝.555)。

まず属性的要因に着目すると，前項でクロス集計表によって確認した影響関係は，進路意識ほかの要因をコントロールしても統計的に有意であることがわかる。

大学・短大，専各に対するランク下位校の係数が負であることから，中位校では他の要因を一定にしても進学(専各，大学・短大とも)を選択する者が多い。反対に就職に対して下位校の係数は正である(5％水準で有意ではない)。もっともこの結果は，現在の「標準的な」進路が中位校では進学，下位校では就職であることを示しているにすぎない[10]。

性別(女子ダミー)による影響をみると，就職，専各に対しては5％水準で有意ではないが負の効果を，大学・短大に対しては有意な負の効果を及ぼしており，女子で「何もしない」者が相対的に多いこと，とりわけ大学・短大進学希望者が少ないことを示している。

親の進学に対する希望による影響からは，親が進学を望まない，もしくは親の希望がわからない場合に，その他の生徒と比較して進学を選択する確率が低い，いいかえれば「何もしない」可能性が高まることがわかる。親の進学に対する希望がここで想定しているように家庭の経済的状況の代理指標であるとするならば，これは経済的に困難な家庭の生徒の方が他の条件が一定ならば「何もしない」可能性が高いことを意味する。就職に対して親が進学を「望まない」は有意な正の効果を及ぼしており，経済的な困難さが動機となって就職を希望する生徒が一定数存在していると解される。しかし先にも指摘したように，かれらにとって進学の選択肢は閉ざされているため，魅力的な職種・求人先を見つけられなければ，実質的な就職活動を「何もしない」まま進路未定者になる可能性も高いといえる。

学校の成績は，専各，大学・短大ともに進学に対しては有意な正の影響を及ぼしていて，成績の良い生徒ほど進学を選択する傾向にあることがわかる。ところが就職に対する影響は有意ではなく，成績の面では就職希望者と「何もしない」生徒の間に大きな差異はないことになる。

進路のための活動の有無に最も大きな影響を及ぼしていると考えられるのは，欠席日数の多さである。就職，専各，大学・短大のいずれに対しても，欠席日数が10日以上の者は，10日未満の者と比較して「何もしない」確率は高くなる。欠席日数が無回答の者も係数の符号・絶対値から判断して10日以上の者と同様の傾向を示しており，欠席日数が多いために正確な値を回答することができなかったものと判断して差し支えない。就職であれ進学であれ，学校推薦の際には欠席日数が大きく考慮されるため，欠時数の多い生徒は進路のための活動を行おうにも学校推薦ルートにのること

ができない，もしくは実際に活動を行っても合格の可能性が低いことを事前に知って，自ら進路活動から撤退してしまうのであろう。

以上のように，進路意識のレベルに関係なく，属性的要因や学校の成績，欠席日数等の要因によって進路活動を「何もしない」可能性に対するリスクは大きく異なる。ちなみに表5-4で得られたパラメータ推定値をもとにそれぞれの進路が選択される確率を推計すると[11]，同じ下位校の生徒であっても，＜男子，親が進学を望む，欠席日数10日未満，成績＝3＞の生徒では，就職22.0%，専各30.4%，大学・短大42.3%，「何もしない」4.4%であるのに対して，＜女子，親が進学を望むかわからない，欠席日数10日以上，成績＝1＞の生徒では，就職35.0%，専各11.0%，大学・短大2.0%，「何もしない」51.8%となる。両者の間では進路意識のレベルが同じであるとしても，「何もしない」可能性がこれほど異なるのである。

(3) 進路意識と進路活動の関係

表5-4は，上記のような要因をコントロールしてもなお，進路意識は進路選択に有意な影響を及ぼしていることも示している。つまり，進路意識は，属性的要因，成績，学校へのコミットメント等を媒介して進路選択を規定するだけでなく，進路選択に直接的な影響力を及ぼしていると考えられるのである。ここではそれぞれの進路意識別に分析結果を解釈していくことにしよう。

現在志向

現在志向因子は，就職，専各，大学・短大のいずれに対しても負の効果を及ぼしており（ただし専各については5%水準でわずかに有意でない），現在志向が強い者ほど「何もしない」可能性が高い。表2-3においてタイプ5～8，すなわち現在志向のグループにおいて進路未定者が多いことを示したが，ここでの結果は進路選択に影響を及ぼす属性的要因，成績，欠席日数等をコントロールしてもなお，この結論が正しいことを意味している。現在志向因子は，「将来よりも今の生活を楽しみたい」，「将来のことを考えるのは面倒だ」等の項目を説明する因子であるから，これらの意識性向を強く有する生徒が「何もしない」可能性が高いという結果は当然のようにも思われる。しかし，進路未定者がきわめて少数であった時期，あるいは進路未定者が皆無に近い学校においては，進路意識が実際の進路活動の有無に影響を及ぼすことは論理的にありえない。つまり，ここでの分析結果は必ずしも自明なことではなく，むしろ今日的な現象であると捉えることができるのである。もちろん進路未定者がきわめて少数であった時期の生徒は，現在われわれが調査対象としている生徒よりもはるかに「将来志向」であったため，意識の影響が進路活動の有「無」として顕在化しなかっただけのことかも知れない。したがって生徒の時間選好の変化については別の機会に検証する必要があろう。仮に意識のレベルにそれほど大きな変化がないとするならば，現在志向が進路未定を導く要因である（要因になった？）という結果は重視されてよい。

メリトクラシーに対する親和性

メリトクラシーに対する親和性因子もまた，就職，専各，大学・短大のいずれに対しても有意な影響を及ぼしており，進路のための活動をするか否かを判別する有効な要因となっている。ここでは「成績の良い者が就職で有利なのは当然」，「学校の成績によって将来がかなり決まる」等に対して否定的な考えを持つ生徒の方が「何もしない」可能性が高いことが示されている。一方，活動をした場合に就職もしくは進学（専各，大学・短大）のいずれを選択するかに対してはメリトクラシーに対する親和性は影響しない。このことは就職，専各，大学・短大それぞれに対するパラメータ（係数）の大きさがほぼ同じであることから推測できる。

実際の成績は就職希望者と「何もしない」者の間に大きな差はなく，進学希望者と比べれば両者ともに低いことは先に言及した。実際の成績によって選択可能な進路は制約されるため，成績上位者では進学，下位者では就職が選択されやすいという違いはある。しかし進路活動の有無に限っていえば，成績の如何にかかわらず，学校的価値に親和的であるか否かが重要な役割を果たしていることをここでの結果は意味している。

同時にこの結果を，就職，進学を問わず，進路決定のプロセスが依然として業績主義的な価値観によって編成されているため，こうした価値観に馴染まない生徒が自ら進路活動から撤退してしまう可能性が高い，と理解することもできる。さらに，「親が進学を望まない家庭においてメリトクラシーへの親和性は低い」という第3節の分析結果をあわせて考えるならば，経済的・階層的要因が業績主義的価値観への親和性を媒介して進路活動の有無に影響を及ぼす可能性が存在することをあわせて指摘しておきたい。

表5-5　4月からの進路に対する満足度(%)

		4月からの進路						合計
		正社員として就職	大学・短大に進学	専各に進学	アルバイト・パート	まだ決まっていない	その他	
現在決まっている進路に	非常に満足している	32.8	44.1	45.2	18.4	10.6	54.5	35.7
	やや満足している	40.7	40.1	37.7	31.6	16.5	18.2	36.0
	少し不満である	16.9	11.4	13.9	29.1	25.9	9.1	17.0
	かなり不満である	9.6	4.4	3.2	20.9	47.1	18.2	11.3
	合計	100	100	100	100	100	100	100
	(N)	(177)	(297)	(281)	(158)	(85)	(11)	(1009)

適性把握失敗

適性把握が進路選択に影響を及ぼしているか否かはきわめて重要であると考える。なぜなら，少なくとも建前のレベルでは，学校の進路指導は「自分はどのような職業に向いているのか」，「自分がやりたいことは何なのか」を把握させるところから出発するからである。ところが結果をみると，適性把握失敗因子は専各に対してのみ負の効果を及ぼし，就職，大学・短大に対しては有意な効果を与えていない。つまり，適性把握が出来ていると考えている生徒ほど専各進学を選択するものの，就職希望者，大学・短大進学希望者は適性把握においては「何もしない」生徒と変わらないことを意味する。適性把握と専各進学の間に強い関連があることは表2-3においても指摘し，就業経験のない高校生にとって現実の職業に対するイメージを示してくれるのが専各なのではないかとの仮説を提示した。ここではそれに加えて，現在の進路多様校の高校生にとって，高卒就職では得られない魅力的な職種に就くためのルートとして，専修学校への進学が機能していると考えたい。専修学校修了後に希望していた職種に必ず就ける保証はないとしても，「やりたいこと」が明確な生徒にとって専各進学は有力な選択肢であり，しかも満足度が高い納得のゆく進路なのである(表5-5参照)。

一方，大学・短大への進学を希望する者は，自分が将来就くことになる職業を高校卒業の時点で決めてしまうのではなく，より幅広い進路の可能性を求めて進学するのであろう。それには学力，家庭の経済的状況による障壁がないことが前提であり，属性的要因において有利な生徒でなければこうした進路選択は困難である。だからといって，こうした大学・短大への進学をしばしば揶揄されるように「モラトリアム進学」と捉えるかどうかはまた別の問題である。

むしろ問題なのは就職希望者と「何もしない」者との間に適性把握においてほとんど差異がないことである。今回われわれの調査対象校となった高校においても，職場体験学習や進路講話等を通じて生徒の進路意識を高めるための試みが実践されている。進路指導によって「自分がやりたいこと」，「自分に向いた職業」が発見されたとしても，高校生にとって魅力的な職業は限られているため，こうして高められた進路意識は「就職」ではなく「進学」に向かわざるを得ないことを示唆しているのである。

(4)　進路選択をめぐる環境条件と進路意識の影響力

ところで，進路意識の進路活動に対する影響力の大きさは，各生徒がおかれた社会的文脈，いいかえれば進路選択をめぐる環境的な条件に依存しないのだろうか。つまり，就職，進学が容易で，さほどの努力を要せずに進路決定が可能な場合と比べて，条件が厳しい場合の方が，進路活動を行うか否かに対して，意識の影響がより前面に現れるのではないか，という疑問である。ここでは前項で行った多項ロジット分析と同一のモデルを用いて男女別に分析を行い，進路意識の影響力をそれぞれ比較することによって上記の課題を検討する。ここで男女別に分析を行うのは，以下に示すように進路選択をめぐる条件が男女で明らかに異なると考えられるからである。

就職の場合，女子の求人倍率のほうがより低いことはよく知られており，明らかに女子の方が条件は厳しい。また進学の場合も，Y県における平成13年3月の県立高校卒業者(調査対象者の前年度卒業生)全体の大学・短大進学率は男子39%，女子46%，また専門学校(専修学校専門課程)への進学率も男子16%，女子22%と女子の方が高いにもかかわらず[12]，表5-3より推測されるようにわれわれの調査対象校では女子の大学・短大進学率は男子よりも低い。とりわけこの傾向はランク下位校において著しく，全国的に高等教育への進学が容易になっているといわれる中，その恩恵を受けていないのがランク下位校の女子なのである。ランク

表5-6 進路選択に関する多項ロジット分析（男子のみ）

		就職		専各		大学・短大		（何もしない）
		B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	
（切片）		.706		1.234*		1.159+		
親が進学を	望まない	.219	1.245	-1.260*	.284	-3.002**	.050	-
	わからない	-.049	.952	-1.034*	.355	-1.443**	.236	-
	望む	-	.	-	.	-	.	-
ランク	下位校	.849+	2.337	-.305	.737	-1.395**	.248	-
	中位校	-	.	-	.	-	.	-
欠席日数	"無回答・不明"	-1.239*	.290	-.779	.459	-3.043**	.048	-
	10日以上	-1.578**	.206	-1.524**	.218	-2.097**	.123	-
	10日未満	-	.	-	.	-	.	-
高校の成績（5段階）		.072	1.075	.435**	1.544	.862**	2.368	-
進路意識	適性把握失敗	-.149	.862	-.616**	.540	-.068	.934	-
	メリトクラシー	.198	1.219	.200	1.222	.316	1.372	-
	現在志向	-.214	.808	-.183	.833	-.506*	.603	-

Model Chi-square=250.6, DF=27, p=.000
** : p<.01, * : p<.05, + : p<.10

表5-7 進路選択に関する多項ロジット分析（女子のみ）

		就職		専各		大学・短大		（何もしない）
		B	Exp(B)	B	Exp(B)	B	Exp(B)	
（切片）		.559		1.366*		.892		
親が進学を	望まない	.934*	2.545	-1.288**	.276	-1.927**	.146	-
	わからない	.158	1.171	-.337	.714	-.807+	.446	-
	望む	-	.	-	.	-	.	-
ランク	下位校	.597	1.816	-1.261**	.283	-1.355**	.258	-
	中位校	-	.	-	.	-	.	-
欠席日数	"無回答・不明"	-2.128**	.119	-1.161*	.313	-1.931**	.145	-
	10日以上	-1.633**	.195	-1.438**	.237	-1.892**	.151	-
	10日未満	-	.	-	.	-	.	-
高校の成績（5段階）		-.003	.997	.385**	1.470	.616**	1.852	-
進路意識	適性把握失敗	.162	1.176	-.397+	.673	.308	1.361	-
	メリトクラシー	.505*	1.658	.460*	1.584	.312	1.367	-
	現在志向	-.674**	.510	-.416+	.659	-.585*	.557	-

Model Chi-square=268.4, DF=27, p=.000
** : p<.01, * : p<.05, + : p<.10

下位校の女子の進学率が低い理由は進学を望まない親が多いことにあるのだが，この点についてはここでは立ち入らない。いずれにしても就職，進学ともに男女間で条件の厳しさが異なることは明らかであろう。

さて，分析の結果は表5-6（男子），表5-7（女子）にそれぞれ示した。欠席日数，成績など進路意識以外の諸要因については，男女別にわけて分析を行っても結果はほとんど変わらないといえる。就職，進学を問わず，内定者・合格者の選抜方法は男女ともほぼ同一だからである。ここでは男女間で影響力の差が見られた変数についてのみ言及しておく。

親が進学を「望まない」が就職に対して，女子では有意に影響しているが，男子では有意ではない。クロス集計（表5-3）では男女ともに親が進学を望まない場合，就職希望者が明らかに多いので意外な結果であった。おそらくこれは，男子の場合，進学を望まない親が女子よりさらに少ないために統計的に有意な影響として現れなかったためであると考えられる。また，男子では，専各に対して学校ランクが有意な影響を及ぼしていない。男子の場合，ランク中位校では大学・短

大進学者が，下位校では就職者が相対的に多いものの，専各進学率にはランク間でほとんど差がないからである。これに対して，女子の場合は大学・短大，専各ともに低ランク校で進学率が低いことがあらためて示されている。

一方，3つの進路意識の影響力は男女間でいずれも異なっている。「現在志向」は大学・短大に対しては男女ともに有意な負の影響を及ぼしているが，就職，専各に対しては女子の場合のみ有意である。同様に「メリトクラシーに対する親和性」も女子では就職，専各に対して有意な影響を及ぼしているにもかかわらず，男子ではともに有意でない[13]。「現在志向」，「メリトクラシーに対する親和性」ともに，係数の符号は男女共通なので全体的な傾向は同じであるものの，影響力の大きさが性別によって異なるのである。就職，進学ともに条件の厳しい女子の方が，進路活動の有無に対して進路意識が果たす役割が大きい。つまり，女子の場合は，成績や欠席日数等が同じであるとしても，現在志向で，学校的な価値観に否定的であるほど「何もしない」，すなわち自ら進路活動から撤退してしまうのに対して，条件的に有利な男子の場合は進路活動を行うところまでは至る可能性が高いことを意味しているのである。

現在志向，メリトクラシーに対する親和性は，「何もしない」という消極的な選択に影響を及ぼしているのに対して，「適性把握」は積極的な専各進学を促すという点で意識の影響の現れ方は異なっている。しかし男女間で適性把握の影響力が異なる理由も，前二者の場合と同様に理解することが可能である。女子において適性把握が専各進学に対して及ぼす影響が5％水準でわずかに有意でない理由は，女子では適性把握と専各進学の関連が弱いためではなく，適性を把握していても「何もしない」生徒が多いからである[14]。すなわち，この結果も男子に比べて女子の方が，進学が困難であることに影響されていると考えられるのである。

C　小括

本節での分析を元に，進路のための活動を「何もしない」生徒の特徴，すなわちどのような生徒が「何もしない」まま進路未定者として卒業していく可能性が高いのかをまとめておく。進路意識以外で「何もしない」可能性を高める要因を列挙すると，女子，家庭の経済的状況が厳しい（親が進学を望まない，もしくはわからない），下位校，成績が低い，欠席日数が10日以上となる。これらの属性，特徴を有する生徒は，進路意識のレベルにかかわらず進路未定者となるリスクが高い。普通科高校からの就職は困難になりつつあるため，学力，家庭の経済的状況による障壁から進学を選択することが不可能であれば「何もしない」可能性はかなり高くなる。一方，進路意識による影響からは現在志向で，メリトクラシーに対して親和的でない生徒ほど「何もしない」ことが明らかになった。学校生活を将来への投資と捉え，学業成績（学歴）によるメリトクラティックな選抜による職業への移行，ひいては自己実現を目指す経路とは異なるルートをとろうとする生徒たちは，進路選択が困難な状況におかれている。とりわけ，就職，進学ともに，そもそも条件的に不利な女子において，進路選択が各個人の意識によって強く規定される傾向にあることも示された。

（濱中義隆）

6．結論と含意

この論文は，普通科進路多様校の生徒の進路意識に焦点をあて，そもそもかれらの進路意識はどのような構造を有しているのか，またそうした進路意識がどのように形成され，最終的な進路選択にどういった影響を及ぼしているのかを分析し，高卒無業者問題について新たな知見を付加することを目的としてきた。

まず，第2節では高校生の進路意識に関する様々な質問項目を用いた因子分析を行うことにより，進路意識の構造を仮説的に提示した。そこでは高校生の進路意識について6つの次元（因子）を抽出し，さらに因子間の相関関係をもとに，「時間選好（現在志向）」，「適性把握」，「メリトクラシーへの親和性」の3つの次元が，進路選択に影響を及ぼす核となる意識であることを示した。第3節では，上記の進路意識がどのような要因によって規定されているかを分析し，「現在志向」は「学校外文化」によって大きな影響を受けていること，「適性把握失敗」に対しては「学校ランク」が主な規定要因になっていること，「メリトクラシーへの親和性」については「家庭要因」が影響を及ぼしていることが明らかになった。

つづく第4節では，第2節で明らかにされた生徒の進路意識の構造をもとに，それに対する普通科高校進路多様校の教師たちの進路指導観や，実際の活動に伴う困難について分析を行った。そこから明らかとなったのは，自己決定を原則とする進路指導のもとでは，指導にのってこない普通科高校の生徒たちを進路未定

者へと導かざるを得ない指導の原則と現実とのずれであった。そして第5節では，生徒の属性的要因，進路意識によって進路選択はどのように影響されるのか，特にどのような生徒が進路未定者になり易いのかを多項ロジット分析を用いて検討した。その結果，性別，家庭の経済的状況，成績等によって進路未定者になるリスクが異なると同時に，3つの進路意識がそれぞれ進路選択に影響していることを示した。

以上の分析結果から，進路多様校における進路指導に対してどのようなインプリケーションが導かれるであろうか。

本稿で提示した3つの進路意識は，属性的要因その他をコントロールしても進路選択に直接的な影響を及ぼしていた。このことは，進路意識が学校，とくに進路指導を通じて形成されているとするならば，進路意識の低い生徒に対する働きかけにより進路未定者が減少する可能性が残されていることを意味する。実際，現在の高校における進路指導は生徒の進路意識に働きかけることにより，進路活動(行動)を喚起することを前提に運営されているからである。

ところが，進路活動の有無を左右する「現在志向」，「メリトクラシーへの親和性」は，第3節の分析が示すように学校へのコミットメント，成績等と相関があるものの，学校外文化との接触や家庭の経済的状況など学校外の要因によって大きく規定されている可能性が高い。進路活動を取りやめてしまう意識の根元は，学校の外での生活の影響をもっとも強く受けてしまうのである。

あるいは，遅刻や欠席，勉強への取り組みなど学校生活に対する態度・行動は，意識を規定する「原因」ではなく，むしろ意識の「結果」として捉えるべき性質のものなのかも知れない。就職か進学かを決めるチャーターの希薄な普通科進路多様校の場合には，とりわけ，高校入学時点ですでにこうした意識が形成されていた可能性も否定できない。仮にそうであるとするならば，チャーターという象徴的資源も，職業教育という訓練機会ももたない普通科高校にできることは，生活指導によって欠席日数を減らしたり，赤点を出さないような教科指導をしたり，あるいは直接的に職業経験と結びつかない可能性を認めつつ職場見学などの機会や先輩の体験談などを提供するくらいだろう。いざ就職・進学のための活動を開始する時期になってみたら，すでに進路選択の機会は失われていたということがないように，日常から生徒に働きかけるのが精一杯の状況なのである。

それでは「適性把握」についてはどうか。先述のように，高校における進路指導は「適性把握」から出発する。いくつかの調査対象校で進路未定者の増加に対応して導入された，職場体験学習や進路講話などの諸施策も「適性把握」を目的にしたものであった。もちろんそこには，適性把握の曖昧さが進路未定の原因であり，適性を把握することを通じて生徒が自らの将来について真剣に考えさせよう，という教員の進路指導に関する認識枠組みが背景にある。本稿で因子分析を用いて示したように「適性把握」と「時間選好」には相関関係があり，こうした考え方は一見，正しいように思われる。しかしながら，図2-1で想定したように「時間選好(現在志向)」が「適性把握(失敗)」の原因であるとするならば，進路指導における適性把握のための試みは，将来のことを積極的に考えている生徒にとっては有効であるが，そうでない生徒にとっては大きな効果を期待することはできない。そもそも，将来のことを考えようとしなくなった生徒を前に，適性把握を促す機会を提供しようとしても，その活動にさえ生徒たちはのってこようとしないからである。

さらに，第5節の分析によると，少なくとも普通科高校の場合，「適性把握」を推し進めることは，他の条件が一定ならば高校卒業時点の就職ではなく，専修・各種学校への進学という選択を導く。進路指導担当教員に対するインタビューでは専修・各種学校進学に対しては修了後の進路について懐疑的な意見も聞かれたが，生徒本人は適性を把握していると考えているのだから，進路指導によって専各進学を止まらせる理由はない。また，より高い学歴を獲得することによって自己実現を図ろうとする生徒が大学・短大へ進学することを拒む理由もない。

もちろん高等教育卒の進路未定者も増加している現状に鑑みれば，安易に進学を勧めることは単なる問題の先送りにすぎないとの批判がおこるであろう。それでも批判を承知の上で言えば，現状において，普通科の進路多様校において進路未定者を減らすための最も効果的な方策は，生徒を就職へと水路付けることではなく，進学者を増加させることだと思われる。就職へ水路づけようにも，それが行えるだけの職業的な訓練機会を提供する施設も教員も与えられていない。就職を当然と見なすチャーターも希薄である。こうした職業選択へ向けての資源が乏しい普通科の進路多様校という環境のもとでは，適性把握は，その適性を生かす高卒後の専門教育にゆだねざるを得なくなるのである。

誤解のないように付言しておきたいのは，高校卒業

時に積極的に就職を希望する生徒の存在を否定しているわけではないことである。そうした生徒に対する就職支援は依然として重要な課題である。ただし生徒が希望する職種・企業に就職できるか否かは，進路意識の問題というよりは，労働市場の需給状況など学校外の要因によって規定される側面が強いと考えられる。とくに職業へ向けての社会化を行う上で資源の乏しい普通科高校においては，学校の進路指導のみによって解決可能な範疇を越えているといえるだろう。

もちろん進学が有効な方策であるためには，家庭の経済的状況による障壁がないことが前提である。耳塚(2000)[15]は，「就職の狭き門を通り抜けることのできるのは進学希望を持たないまじめな(欠席や遅刻が少なく学業にもまじめに取り組んだ相対的に成績のよい)生徒」であり，就職も困難であった生徒のうち，「教育費の負担が不可能な層にとっては，『進路未定』『無業者』『フリーター』という進路しか残されてはいない」と述べ，「機会の喪失に対処する制度的施策—たとえば，奨学金制度などの経済的支援」が必要であるとしている。たしかに本稿の分析においても「まじめ」でない生徒，また教育費の負担がおそらく不可能な「親が進学を望まない」家庭の生徒において進路のための活動を何もせず，進路未定やフリーターとなる者が多いことが示された。しかし同時に，「時間選好」や「メリトクラシーに対する親和性」の意識が，行動レベルにおける「まじめさ」とは独立に進路活動の有無に影響を及ぼしていることも明らかにした。つまり，現行の進路決定のプロセスが就職，進学を問わず業績主義的な価値観によって編成されているため，そもそもそうした価値観に馴染まない生徒は自ら進路のための活動をおりてしまうのである。

もちろん以前から業績主義的な価値観に馴染まない生徒は存在していたに違いない。それでも進路活動を「何もしない」生徒が少数であったとすれば，それは生徒本人の中では何がしかの矛盾を感じながらも，高卒時の進路によって得られる機会がそれだけ魅力的であったからであろう。また，工業高校など就職へ向けてのチャーターの明確な高校であれば，業績主義的な価値観に強くコミットしていない場合でも，学校側の就職斡旋活動を通じて，最終的に就職を選ぶこともあり得よう。

ところが，機会の側，とりわけ普通科高校生が到達可能な就職機会の魅力が大きく薄れてしまった現在，こうした生徒達を業績主義的な選抜に再び巻き込んでいくことは難しいといわねばならない。進路決定のメカニズムが従来のように業績主義的な価値観によって編成されている限り，かれらにとっては進路選択が困難な状況に置かれたままなのであり，奨学金制度等による経済的支援のみによって解決できる問題ではないのである。

ここで重要な意味をもつと思われるのが，適性把握と専各進学の関連である。再び進路意識によるタイプ分けに従えば，メリトクラシーに親和的でないが，適性を把握しているとするタイプ3やタイプ7において相対的に専各進学者が多いことから，専各進学が従来型の学校の成績を介したメリトクラシーに否定的な生徒にとって魅力的な進路であることがわかる。しかもかれらの進路に対する満足度は高い。つまり，「自分のやりたい仕事」を軸に，それに向けての準備期間を専門的知識・技術に関する教育に充てることに対しては積極的な生徒は多い。こうした現在の高校生の進路に対する意識を掬い上げながら，進路決定のメカニズムを再編していくことが，進路指導をめぐる諸問題を解決する上での鍵となるであろう。それは，職業教育の機会を提供できない以上，普通科の進路多様校という高校にとって残された，進路指導の有効性を発揮できる数少ない道なのかもしれない。

このように見てくると，普通科の進路多様校において多発する進路未決定という問題の困難さが浮かび上がってくる。教員のインタビューにもあったように，高校にはいることがやっとの生徒たちに対し，職業との関連の薄い普通教科の教育を3年間続けることは，メリトクラシーへの親和性を高めることにも，将来志向に生徒を振り向けることにも，さらには，適性把握を促すことにもつながりにくい。よほど「楽しい体験」を提供できない限り，卒業にまで導くことさえ難しいのである。

1970年代，80年代を通じて私たちは，このような普通科高校を，子どもたちの進路機会を制約しないようにという理由で増やしてきた。袋小路になる職業高校よりは，将来に開かれた学校として普通科高校は期待されてきたのである。

進路機会を制約させまいとする原則は，自己決定を原則とする現在の進路指導の基本的な考え方でもある。教員による押しつけを排し，生徒が自ら進路を決定することで，自分の適性に見合った進路を自分の意志で選ぶことができる。将来に開かれた学校は，同時に自己理解と自己決定を原則とする「自由な」学校である。

このような放任された自由のもとで，有効な資源をもたない生徒たちは，自ら進路指導への活動にのらな

いことを選ぶ。成績や家庭環境，性差，欠席日数などを統制した上でも，なおかつ生徒たちの現在志向や適性把握といった意識が，進路活動を行わずに未定者となる可能性を高めているという本稿の知見は，彼らの意志(意識)がそうした行動に反映していることを意味している。その意味で，「自由な」選択を導いているのが，こうした意識だということもできる。学校という場の働きかけから遠ざかる生徒たちに，職業的社会化のための資源をほとんどもたない普通科高校は，専各，短大・大学進学への振り向け以外に何ができるのだろうか。進路の機会を制約させまいとする善意が，自由な選択の結果として，進路未決定者を析出してしまう。生徒たちの意識が自律的で不可避なものとして見なされれば見なされるほど，このパラドクスは混迷を深めていくのである。

(濱中義隆，苅谷剛彦)

注

1))代表的なものとして，
苅谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也　1997「進路未決定の構造」「東京大学大学院教育学研究科紀要」第37巻，pp.45-76，
樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・苅谷剛彦［編著］　2000「高校生分化と進路形成の変容」学事出版，
耳塚寛明(研究代表者)　2000「高卒無業者の教育社会学的研究」科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書　お茶の水女子大学文教育学部教育社会学研究室
日本労働研究機構　1998「新規高卒労働市場の変化と職業への移行の支援」調査研究報告書 No.114，
同　2000「進路決定をめぐる高校生の意識と行動—高卒「フリーター」増加の実態と背景—」調査研究報告書 No.138。

2)苅谷剛彦・濱中義隆・千葉勝吾・山口一雄・筒井美紀・大島真夫・新谷周平「ポスト選抜社会の進路分化と進路指導」「東京大学大学院教育学研究科紀要」第41巻，pp.127-154。

3)本研究は，学術振興会科学研究費基盤研究(B)の助成(研究題目「高校から職業へのトランジションの変容過程に関する研究—「自己責任」時代における進路決定の多様化と遅延のメカニズムの解明—」，研究代表者：苅谷剛彦)を受けて行ったものである。

4)ここで進路多様校として，就職者や進路未定者が卒業時に一定数存在し，いわゆる進学校に類する学校と異なる進路プロフィールを持つ学校をとりあげ，調査依頼を行った。

5)調査の匿名性を守るためにお名前をあげることはできませんが，今回の調査にご協力いただいたＹ県の調査対象校の先生方，ならびに生徒の皆さんに感謝申し上げます。

6)共通性が低いために除かれる項目は，分析が複雑になりすぎることを避ける目的から今回除外したわけだが，その項目が高校生の意識のなかでどのような位置を占めるのか(本当に除外してよい項目であるのか否か)については，質問項目を吟味したうえで再度調査・分析をし，検証を重ねる必要がある。

7)当然ながら，因果モデルとはいえそこで想定される因果はゆるやかなものである。本文中にも述べているが，逆の因果が想定される場合も十分にあり得る。しかしながら，同じ意識のなかでも，直接に進路指導が効果をもつと思われるもの，そうでないものなど，さまざまなレベルは存在していよう。ここでたてられる意識の因果モデルは，そうしたレベルの違いを考慮しながら意識次元どうしの付置関係を構造的に捉える目的をもつものである。

8)もちろんこの因果についても逆は想定し得る。社会に出ることへの不安や忌避感があるために，今かれらが生活する学校での成果が将来に影響する，とする学校的価値にコミットしているのかもしれない。

9)確かに，経済的余力が無くても親が進学を望むケースが無いとは言えない。奨学金や教育ローンなどを利用すれば子供を進学させるのに必要な資金を得ることは可能であり，そのような形での進学を望むことも考えられる。また，親は費用を負担せず本人に負担させる，すなわち働きながら進学させるという選択肢もありうる。しかしながら，今の日本においてそれらのようなケースが一般的であるとは必ずしも言えない。むしろ，奨学金やローンを使わなければいけない低収入の家庭ほど返済やその他のリスクを考えて，積極的に進学を望むようなことをしないのではないか，と考える方が妥当と言えるであろう。

10)この結果を別の視点から見れば，下位校では学力その他の要因によって中位校よりも進学が困難であるため，「何もしない」生徒が多くなると読むことも可能であろう。つまり中位校において「何もしない」生徒が少ないのは，下位校に比べて(就職ではなく)進学が容易だからだということである。

11)進路意識に関する各パラメータについては，それぞれ下位校の平均値を代入することにより計算した。

12)平成13年度Ｙ県学校基本調査結果報告より。

13)大学・短大に対して，「メリトクラシーに対する親和性」は男女ともに有意な影響を及ぼしていない。この結果は，全体で分析を行った表5-4をもとに提示した解釈と矛盾するように思われる。ただし，係数の大きさは，全体，男子のみ，女子のみの場合もいずれも同程度であり，サンプルを男女に分割したため標本数が少なくなったことにより，統計的に有意な影響を確認できなくなったものと理解できる。いずれにしても「現在志向」に比べれば，「メリトクラシーに対する親和性」の進路活動の有無に対する影響力が小さいことは確かである。

14)女子において，適性を把握しているとするグループ(すなわち，図2-2におけるタイプ1，3，5，7)の専各進学希望率は39%であるのに対して，適性把握していないグループ(タイプ2，4，6，8)では22%となり明らかに適性把握と専各進学には関連がある。ところが「何もしない」比率をみると，タイプ1,3,5,7においても女子では16%に及び，男子のタイプ1，3，5，7の専各35%，「何もしない」9%に対して，専各と「何もしない」の間のオッズは女子の方が小さいのである。

15)耳塚前掲書。